
チョメディー

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チョメディー

【Zコード】

Z8141A

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

高校生のコメディー小説。初めて書いたコメディーなので、完全にノリだけです。ちなみに続編があるので、気に入った方はチョメリップ2をご覧ください。

第一話～はじめまして、今から学校へ行かよ～

心地良い朝…風になつた気分だ。

俺の愛車、命名『男の機関銃』にまたがり電車に乗るため駅へと向かう。

『ブーーン』

「あんた…なに口で効果音出しちゃんのよ?」

『おわつ?なんだよ舞!人がせつかく風を感じてたのによお～』

朝つぱらからやつかいな奴に会つちまつたから紹介しよう。

「こつは山下 舞家^{まい}が隣同士で幼なじみつて奴だ。^{やました}

顔は可愛いんだが、性格がおてんばですぐ暴力を…

～ドガフ～

……ほらね…

「そんな紹介すんじゃないわよ!勘違いされるでしょ」

つてか…心の声なのに聞こえちゃうんですね。

「大体ね自転車使う程、駅まで遠くないでしょ?」

家から駅までは歩いて一分である。

『俺はめんどくさがつ蜃さんなの』

「あつたぐ、あんたはこつせんやつて…」

やばい、舞の説教が始まる！－

こここの説教は長いからバックれなければ

／＼ガツ＼＼

「口で言つよつて…」

を付けるな…

腹に走る激痛を抑え、駅に向かおうとする。

チヤリの後ろにはちやつかり舞が座つてやがる…－

『舞さん…？あなたは徒步で行くのですよ

「口よりも体で…」

『「じがせて下せーー』

…トホホ。

おつと、俺の紹介がまだだつたな。名前は沖本おきもと 明高校あきこう一年生だ。髪型など詳しい事はストーリーで出てくると思つから期待してく

れ。

「あんたさあ……しゃべるなり『』付けなよ…」

だから…聞こえちゃうんですか？

ちなみに舞とは付き合つてなんかいないぞ！

コメディーにはすぐ殴る女は付き物だろ？

たいていにしきゅうのつて女が実は主人公が好きで後半その想いを…

／ドガツ／

「それは言つちやダメでしょ！つてか私彼氏いるからーー。」

ああ、そうだったな。まあそんなストーリーにされちゃ俺は困るからな。

作者

「いや、それは分からんぞ……？」マジ

「…………え？」

第2話～モザイク…？あ、伏せ文字って書つんですか？～

ガヤガヤといつねりこ教室…やつと学校に着いた。

「よお、明一」

『おはよお、たく』

「おかしくない…？なんで俺の名前モザイク入れちゃったの…？」

『そりやあ、お前の名前が　だし呼ぶ度に　になるからだよ
…。』

「正しいよ～モザイクの位置正しいけど、心痛いからー。」

『　、』

「もはや何言ひてゐか分かんねえよー。」

朝から俺のボケに付き合ってくれてこるのは隣の席の吉澤
よしざわ
匠親友たくみ

と呼べる奴だ。

まあ…こんな感じで今日も始まるわけだ。

チヤームと共に先生が入ってきた。

先生は俺を見るなり

「明一貴様あ～！なぜ茶髪を直して来ないんだあ～！しかもサラサ

「ラの長髪にピアスまで開けて整った顔立ちは母親譲りかああ～！」

と怒り狂っている。

「あ、今いい感じに俺の事伝わったんじやん？」

イエーイ

「なんて言つてる場合じやない。先生の教科書が赤く光りだしたぞ
!!」

「心の力が溜まつた…くらえええ！バオウ・ザケ…」

いやいやいや、パクリだからそれ！

「せい…」

投げてきやがつた！

くづくづく…突つ込むのに必死で回避できなかつた…。

教科書の角が頭にぶつかりリアルに痛い。

「明…マズイぞ！ぶつどび率がもう200%を越えた！」

スマーラですか…？

「しゃあああ！あいつ飛び頃だぞ！」

「もうつたあああ！」

「結局、ドン一は使えないんだあああ！」

つて、このクラスおかしいだろ！

しかも最後の奴の主張は使う人次第だから……

「止めてください明さん！あれを使つたら……俺達まで……」

何キャラですか、匠さん。僕はそんな技もつてしませんよ？

「まあまあ、許してやりなさい

急に先生が優しくなだめた……！

「…………」

その番組もう終わつたから……！

「お前、ツツコミだかボケだか分かんねえよ」

新キャラが出てくるまでずっと一役は疲れるな……。

第3話～高校三年生で設定しないで本当は良かったと思つた瞬間～

暇…ひま…ヒマ…ヒマだあーーー！

授業中つて本当に暇だよなあ。

何か面白い事でも起きないかなあ…。

例えば～いきなり匠が死ぬとか、いきなり匠が血い吐くとか、極限状態まで追い詰められた二人は永遠に結ばれるとか、いきなり匠が死ぬとか…

「いや、ひどいからー！とか何気に俺が死ぬ一回使つてるからねー。」

『匠、お前のシッコ!!…シマんねえな…』

「…ガーンーーー！」

あらり、匠が真面目に落ち込んだ。

『悪かつたな。じゃあ俺がシッコ!やつてやるから匠がボケてみな?

「うーん！僕ボケるーー！」

…匠つて実はウザいキャラだったんだな。知らなかつたよ。

よおーし、徹底的にイジメ…いや、つづこんでやるー。

「……オラ匠」

『変顔か!』

パチーンと音が鳴り響く。

「違くね!？顔関係ないよね?ほり…オスが になつてて…」

『変顔か!』

パチーンと音が鳴り響く。

「分かった分かった!ゴメン!降参降参!俺にギャグは向いてないよ」

『お前高一だから』

パチーンと音が鳴り響く。

「え…?ツツ『//本気過ぎない?つてかボケてないから!降参だつて…』

『お前高一だから』

パチーンと音が鳴り響く。

「ちよつと…変換し間違えた事から偶然生まれただけだから…高二じゃなくて降参だから!」

『お前高一だから』

パチーン…

このやりとりが一時間続いた。

匠の腫れぼったいホツペタを見て俺はジジイ://をやるひと決意した。

第4話～ひょっとして、もしかして、あの子って、カフュラッシュ～

『ああ～マヂでヒマ～』

「あなた…前回散々人の頬ひつぱたいといて言ひ事はそれですか？」

『鏡餅か…』

～ペニン～

ふーん、人の頬つて叩き過ぎるとパチーンからペニンになるんだあ

「辞めよつよもつ…」

『だつてお前それはマヂで鏡餅だぜ？』

両方の頬の色が赤を通り越して紫色になり腫れ上がっている。

「明のジッコリやだよ…」

『勘違いするなよ匠！俺は匠だからこその叩いているんだ！もつと面白いボケの奴がいたら叩いたりせずに笑いに変えるぞ』

「重く酷いな…」

はあ～ボケが面白い転校生でも来ないかなあ…。

「ええ～、ここで転校生を紹介する。入ったまえ。」

タイミング良ッ！

「今日から転入してきました 鎌田 友美（かまたともみ）です。」

可愛いーー。ええ女やあ。おじさん惚れつけましたよー。

黒く輝いたストレートにパツチリした目。白い肌。身長は一人でベンチとかに座つて首を俺の肩に「ロロン」となつたらちよつと良さそうなくらいだ

「ええ～これで三人目のクラスメイトだ。仲良くするよ！」

少なッ！

今まで匠しかいなかつたのこのクラスー？

…え？じゃあ第一話でスマブ 風に襲つてきた人達だれー？

「田で見るのではない。感じるのだ」

何言い出すの先生ー？

「…母さん」

おい匠、何もないとい見て手え振るなよ！

つてかお前の母さんまだ生きてるだろー！

『戻つて来ーい！匠いー』

～ポワーン～

「こいつの頬つぺたどんな効果音だよ！」

叩いたら和んじゃたよ！」

「じゃ～友美ちゃん。鏡餅の隣の席に座つてくれ

先生まで匠の事、鏡餅つて言つちやつてるし。

「よひしきね、鏡餅さん」

……俺の隣きた～！

『間違つてゐから～明らかに鏡餅は匠だろ～俺の頬つぺた腫れてないよ～』

「……！鏡餅じゃ……ない？」

そんなショックなんだ～！？

つてかこの子もしゃ天然さんなのか？

TENNENSANなのかあ～！？

第5話～自然と僕はシッ ハリ役になってしまったね～

「さあてそれでは授業を始めるが。委員長、命令を
いや、三人しかいないクラスに委員長も何も…

「起立！」

いた！！

つてか人数めっちゃ増えてんじゃん！！

ス ブラ風の奴らも帰ってきたのね…。

「礼！…！」

～ペロツ～

「着陸…！」

～プシュウカ～

…やつぱいのクラスおかしいね。

「転入したばかりでやつやくだか…友美、教科書に書いてある文字
…読めるか？」

馬鹿にしそぎだろ」の先生…！

いくら友美ちゃんが天然でも…

「… 読めません」

読めないんだ。君高校生？

「あ… でも、この光ってる文字だけなら読みます。えっと… ザケ」

それ魔本だろ！

つてかパクリすぎだから！

「ゴメンゴメン、それ先生の魔本だった」

ええ～、先生もしやスゴい人なの！？

「今日の所はすまないが、明！教科書を貸してやりなさい」

『あ、はいよ』

『お…』

友美ちゃんに教科書を渡す。その時に偶然にも手と手が触れ合った。

なんだか意識してまうなあ～おい。

「サンクス、鏡餅さん」

古いなサンクス！

つてか鏡餅は俺じゃないから…！

「それじゃ 32ページに書いてある文を読んでくれ

あ…ヤベッ。

今英語の授業なのに国語の教科書渡しちゃったよ！

どうしようどうしよう…

「テープは嫌い」

読み始めちゃったよ！

つかなんだその題名…！

「私はテープは嫌い…物と物をくっつけるまでは良い。

でもこれを人間に例えると、好きな子同士をくっつけようと協力する人…そいつがテープ。

くっついた後…離れた時…テープはどうちかにくっついてるでしょう？

付き合つた後…別れた時…そいつは好きだった人と付き合つてませんか？

私はテープが嫌いだ…

…悲しいなこの国語！！

きつと書いた人、協力してもらつてた人に付き合つてた子を奪われ
ちゃつたんだな。

つてか今英語の授業だから！

今に先生からツツコミが…

「素晴らしい…」

ええ～！！

「英文を訳してくれたんだな」

違うだろそれ！

こんな文章英語の教科書に載んないから！

「先生なあ…英語嫌いなんだよ…。だつてこには日本じゃないか」

お前英語の教師だろ！

そんな英語嫌いの生徒が言つよつた事言つてんなよ…

「先生なあ…映画監督になりたかつたんだ」

語り出しちゃつたよ！

授業やれよーー！

「その時初めて作ろうとしたのが…テープは嫌いだったなあ」

先生が書いたんだこれ！

「…先生」

辞めようぜー

クラス全体がしんみりな空気になるの辞めようぜー！！

「レンタルショップで借りて見る事ー今週の宿題だぞー」

映画化されたーーー！

「ねえ、明さん。今日の帰りにいっしょに見ませんか？」

マジですかーーー？

友美ちゃんからデートの誘いが！

つてか俺の事、鏡餅じゃないって認めてくれたんだ。

『僕、映画大好きいー』

反応が匠とかぶつてしまつた…。

次回はドキドキのデートだよ

第6話～ロコロ見てバイバイ 本当だよ～ワタシ、ナーセントマセ～ン～

～ウイイン～

自動ドアが開き店内に足を踏み入れる。

暑かつた外に比べれば店内はもはや極楽だ。

そして隣には友美ちゃんが

そう、俺は先生が作った（本当だろ？…？）映画を見るために来たのだ。

言い忘れたが、先生の名前は山崎といつ英語教師であり、俺のクラスの担任である。

『えーと…なんて「コーナーにあるんかな』

「あーあれじゃないですか？」

友美ちゃんが指差したコーナーには

『山崎先生コーナー』

と書かれた看板…

まんまやん…！

棚に『テープは嫌い』が並んでいる。

しかし、10本もありながら1本も借りられてなかつた。

先生… 売れてないなあ。だから俺達に宿題とか言って借りさせようとしたのかよ…。

他にどんなのがあるのかと見てみる。

『英語教師』には日本じゃないか編』

これも！？

これも映画化されてんの？

『英語教師』魔本を手にした男編』

これ個人的にはすごい見てみたい気がする。

『英語教師』女子高生を見ていたら… 後編』

見ていたら何！？

つてか後編つて何だよ！！

前編ねえじやん！！

『鏡餅と呼ばれた男』

「これ匠だろー！」

つてかこれだけめっちゃ借りられてんじゃんーー！

「あーこれ見たあーい

友美ちゃんが興味を持ったDVDを見てみると

『英語教師～明、ウチら…会うたびいつもケンカやね編～』

いやいやいやいやーー！

なんかもお全部がおかしくねーー！？

確かに先生の言ひ事は聞かねえけどな…

つてか先生になつてからも映画作つてたのーー！？

結局俺達は『デスノーブル』を借りていつしょに見る事にした。エヘヘ

先生には人気ありすぎて全部レンタルされてましたよーって言つてあげようと思つ。

第7話へやつと新キャラが出でれましたが場面のため一度田の登場は難しく

「本当か…？」

『なんだよ匠。朝っぱらから顔近いってー。』

「第6話の題名…本当なんだな?」

『第6話の題名?…きなら何言いくさの?』

「とほけんなーお前友美ちゃんに何しゃがったー。」

あ～嫌だねえ、モテない男は。

『…フツ』

「フツじゃねえよー俺なんか昨日一人で鏡餅と呼ばれた男を見てた
んだかんなー。」

こいつ見ちゃったんだ!

「マジ泣けるよお～感動したよ…主人公に会つてみてえよー。」

感動系なんだー!!

つてか鏡餅つてお前だよ?

「匠も見たんだ?私も見たんだけど…あれは泣けるわあ～」

俺と匠の会話にいきなり入ってきたのは…知らん！

誰だこいつー？

「なんだよ明、知らないのか？同じクラスの正美まさみだよ」

「ウチの事知らないとかマジショックで意味が普なのれすケロ～」「うぜえこいつ！」

意味が普ってなんだよ！

今はやりのギャルって奴ですかね？

金髪に田サロ行きまくりの肌に超短いスカート。携帯にはストラップやらが大量に付いている。

なんでこいつは山崎に注意されないんだろう？

「んでさあ～タクミン」

タクミン！？

匠の事ですか！？

つて事は僕はアキラン？

テヘッ

「明なんかほつといて、鏡餅になつた男ー・マジヤバイよねえ」

俺の呼び名はそのまんまかい！

「ああ、特にクライマックスのシーンで男の頭にみかんが乗る所なんか涙止まんなかつたよ」

それで涙出るの…？

つてかなんだそのクライマックス…！

「マジあの主人公に会つてみたいって感じだケロ～

正美の語尾うぜえ～…。

つてか主人公のモテルになつた奴が目の前にいるから…

「おはよお～明 昨日マジ意味が普だつたけど楽ピカチュードった
ケロ～」

友美ちゃん、ギャル語つひとつあるから…

仲良く二人でしゃべつていると背後に殺氣大オーラを感じた。

「許さん…俺は許さんぞお～。コメディーに恋愛を持ち込んでじゃあ
いけないなあ」

「そうだケロ～」

『「つっせえ、匠一でめえはゲロゲ～ロヒヨロシクやつてろー』

俺は偶然にも持っていたミカンを匠の頭に乗せ、合掌した後、全身全靈の握力でミカンを握り潰してやつた。

ミカンの汁が垂れて目に入ったのか、匠は叫び、もがいていたが俺には関係ない。

そう、弱者は捨てるのだ。

俺は友美ちゃんと誰にも邪魔されない屋上へと向かった。

第8話～今回のトーマは真面目ですか～（前書き）

題名通り、一切笑い無しです…

第8話～今回のテーマは真面目で～

「ガチャ～

「いい天気…」

俺と友美ちゃんは屋上に来ていた。…一人っきりで。

フェンスの向こう側では部活の朝練や、今から登校してくる生徒が見える。

俺は腰を下ろし、友美ちゃんはフェンスに肘をかけて立っている。
もつと体制を低くして風が吹けばあわよくば…といつ感じだが、今
回のテーマ『真面目』である。

『最近どうよ？』

俺は友美ちゃんに話しかける。

「うーん…」

会話はここで途切れる。

しばしの沈黙。これを先に破るのは友美ちゃん。

「やつぱり…どうも疲れちゃう」

匠…「メン。第6話の題名、実は嘘なんだ。

「デスノー 終了」

「あ～面白かった。山崎先生には悪いけど、映画はいつじやなあや
ね」

『あ……あ』

普通……だよな？

DVDを見終わった後…俺はある違和感に気付いた。

なんだか…決定づけるものはないんだけど。

友美ちゃんって本当に天然なのか？

俺と一人の時とクラスにいる時じゃ人格そのものが違つて感じた。

まあ、会った初日でいつのまでも変なんだけれどね。

無理して過去を隠す…つていうのかな？

とにかく俺はそう感じて友美ちゃんにいつ間に掛けたんだ。

『なんで転校してきたの？家庭の事情とか？』

そしたら友美ちゃんは急に淋しそうな顔で

「逃げてきたの…」

つて言わされたからオジサンも「参ったよ。

「私は前の学校でイジメられてたの。たぶん理由は眞面目過ぎる所…」

だから」との学校ではそんなイメージ作らない様にしてたんだけど… 明にはバレちゃってるよね?」

最初は信じられなかつたよ。こんなに可愛い子がイジメられるんだぜ?」

『…親は?』

「都内の高校へ通うつて無理言つて、今は近くのアパートで一人暮しなの。仕送りは毎月くるけどね」

『…辛くない?』

「全然!もう泣かないって決めたんだもん。弱い自分は嫌いなの。泣くつて事は弱いって事だから…私は」

友美ちゃんは「…」まで言つて口を閉じた。

俺は友美ちゃんをじっと見つめる。しかし、この時は自分で驚く程の冷たい眼差しだらう。

友美ちゃんも先ほどまでの、おちやらけた俺の雰囲気が変わつた事に気付いた様だ。

『…弱いな

予想外の言葉が出てきたのだろうか友美ちゃんは
「え？」
つて顔をしている。

『強やつてのは涙を我慢する事じゃない』

俺の言葉に打つて変わつて今度は怒つた様な友美ちゃんの表情。

「…じやあ、強やつて何よ」

『それは…俺にも分からない。』

「…『ゴメン』

『いや、俺の方に『ゴメン』…でも』

何か言いたかつたがどうすれば伝わるかが分からなくて何も言えなかつた。

「今日は帰るね。楽しかったよ」

『あ、うん』

と匂ひを感じだつた。

～屋上のシーンに戻ります～

「家に帰った後、たくさん泣いた。でも私、決めたよーもつ逃げないから。友美らしく生きていくの」

『ううだな…。それが良い』

誰にだって弱い部分も嫌いな一面もある。

でも誰にだって、ちょっと自分が好きになつたりする事がある。

それと仲間達がいる！

「これからも…みんな私と仲良くしてくれるかな？」

『水は入れ物で形が変わる。人は友達で人格が変わる。

友美ちゃん、俺達といる限りコメディーに巻き込まれてもううから
覚悟しろよー』

「…うん」

そうして友美ちゃんの過去も無事に解決（したのか？）。

俺達は教室に戻つて行つた。

第8話～今回のトーマは眞面目ですか～（後書き）

「メンなあこ、次回からちやんと『メモリー』やります

第9話～夏休みだもん、ハジけましょうよ～

『 もおテンションMAXだあーーー何?何これ?周りはビキーの
お姉様だらけじゃないですか!』

「 海だ海だ! セイセイ泳ぐ! 」 、明! 」

『 待ちたまえ匠君。それより先に、泳まなくてはならないものがあ
るのでな?』

「 おひと忘れてましたよ隊長! 」

「 「 「 お待たせえ! 」 」 」

『 ん~ 夏は良いですね』

「 カヨット... 明... 変な田で見ないでよ... 」

「 ドス~

うん。久しぶりの鉄拳だ。

もう夏休みに入つた事だし、俺、匠、舞、正美、友美ちゃん... あと
舞の彼氏の岩瀬亮太の男女六人で海に来ている。

しかし、ムフフですな。皆様の水着姿... たまりませんなあ。

「 まあ、私まで誘ってくれたのは嬉しいから許すけど

もつ殴つてますよ、舞さん。

『リョーダ…だよな？まあ、ヨロシクな。新キャラなりに俺にイジられてもうううそ…』

「…ケツ」

リョータ君、無愛想お〜。

そんな態度だと

『ちょっと舞さん…リョータつたら女の子が着替えてる間に
「今なら舞がいないから好きな事しほうだい触り放題だあ ホホホ
オイ』
とか言ってナンパしてましたよ?』

と舞に耳打ちしてあげた。

「ドスン~

効果音が強くなりましたね。しかも殴られたの僕ですか？

「リョータはそんな事しないわよー!」

リョータって奴、よくこの暴力女と付き合ってんわ。

「みなさん、パラソルとシートひきましたよ」

さすが友美ちゃん、気がきくね

「日焼けオイルあるから焼きたかつたらウチと焼くケロ～」

「だまれゲロゲ～ロ、ヒツヒツ平泳ぎしてーい。」

「それにしても暑いわね…明、ラムネ買つてきて」

「それは彼氏であるリヨータに頼みなさい、舞さん。

つてか…どうも俺と舞がしゃべる度にリヨータに睨まれるんだよなあ。

もしかしてこいつ妬いてんのか？

まあいいや、とりあえず遊ぼ。

「砂風呂やりたいケロ～」

『じゅあ、匠でも埋めるか』

「なぜ俺！？ちよ…待…うわああああ」

俺は匠を首しか出ない状態まで砂に埋めた後、偶然にも持っていたミカンを匠の頭の上に乗せた。

『第一回、チキチキ！鏡餅割り大会～』

「おかしいから！スイカ割りじゃないので？ってか動けん！！」

『はい、友美ちゃん。この釘木づちでお餅を思いつきましたよーってか
だよ?』

「なんで木づちに釘ついてんの?そんなん持つてくんないよーってか
俺は餅じゃねえー!」

『「つるさこ餅だな…ムンッ…』』

俺はミカンを握り潰し、皮から出る果汁を一滴もこぼさないように皿
の皿に注いであげた。

「ひ…ひあああ!」

今回は前回と違つて体の自由が効かないため、手でふく事もできな
い匠は、なす術もなく泣き叫んでいた。

『よし、飽きた。かき氷でも食に行こうぜ』

「「「お~う」「」「」「」

五人は海の家へ。そう、敗者は去るのだ。

海の家の前に人だかりができている。何やら「メディーの前触れだ。

「ああ~かき氷早食い大会だよ。優勝者には賞金五万円が出るよ

「面白いんじゃない。明、あんた行きなさいよ

『まかせな舞。俺は地元の一部じゃ

「氷荒らしの明さん

と呼ばれた男だぜ?』

『待て…俺も出るが』

やつとリョータがしゃべったね。

『リョータ…あんた、冷たいの苦手じゃないの?』

『かき氷が食えないで…何が男だ』

なんか勘違いしてるぞこいつ…。

『お前には負けん…』

恐ッ!

なんでこんなムキになつてんのか。

『さあー参加者十名が揃つたね。ルールは簡単ーこの巨大かき氷を
1番に食べ切つた人が優勝だ』

うん、想像してたけどこれはデカすぎるよね。

なんでかき氷がごみバケツ一杯に入つてんの?

きたなくね…?

『ちなみに参加費は一人五千円ね』

『言つの遅いから…』

くそ……何がなんでも負けられねえ……

「よーいドン……」

『つまおおーどうおおおーひいやあああ……』

冷たい……。ってかシロップなしつてキツくない?

しかもそこいらに原形のままの氷が「ゴロゴロ入ってるんだけど……。

次々にリタイアしていく参加者達。普通こんな量食えないよな。

残つたのは俺とリョータ、あと一人は家族連れのパパの三人。

（明Vシリヨータ）

「シャリシリ……お前には……シャリ……負けん！」

『ガリガリ……口ほどにもないな……ガリ……量が減つてねえぞ?』

「あれ?

原形のままの氷が入つてるのって俺だけじゃん!

「シリ……虫歯に……しみる」

「情けねえ……！」

（明WIN）

よし、もつ楽勝でしょ。残りはあと少し！

相手はまだ半分以上残ってるパパさんだけだしな。

『明VSパパさん』

『ガリ…あきらめた方が良いっスよ？ガリガリ…もう俺の勝ちっぽいし』

「『ク…私達は、海に心中しきたんです。『ク『ク…でも、この五万円さえあれば…』

おかしいね。まずなんでパパさん原液シロップなの？

しかも心中つて…五万円じゃ足りないでしょ。

でもなあ…聞きたくない事聞いやつたな。

俺が勝つたらあの家族死ぬんでしょ？

あの小れこの子さんの将来はどうなんの？

「『ク…お願いです。『ク『ク…リタイアしてください』

『パク…ガリ』

俺はためらいもなく最後の氷を口に運んだ。

「優勝は…最後に鬼のような卑劣さで勝つた明ちゃん この賞金は

何に使いますか?「

『やうですね…とまあえず高校生らしく新作の北斗の拳S でもやりますわ』

「はい、そんなくだらない事のために一家の生命を経たせた明さんでした。ではシーコーネクストタイム また次回をお楽しみに」

第10話～そりゃ俺だつてやるじゃねー

海で一通り遊び終わった俺達は宿泊先の旅館に来ていた。

なんともボロな所だがこれがまたミソである。

…なぜなら、隣の女子部屋の会話が丸聞こえなのだ

「うへん…ウチ的には旅館よりもホテルが良かつたって感じだケロ

」

「でも結構広いよ?なんか落ち着くし

「あ、男共が入ってきたら私にまかせてね。火器付きショットガン
で…」

うん、最後に変なのが聞こえたけどあえて無視しよ。
しかし、さすが舞だな。友美ちゃんと正美と会うのは今日が初めて
なのにもう仲良くなってる。

「明…」

リョータが俺にかなり低いトーンで呼び掛ける。

『何かな?私に負けたリョータ君』

「話がある…表出よつば」

おこおい、なんのシシ「//」もないのかよ。いつやまた真面目な話かあ～？

（夜中の砂浜）

夜中の海は月明かりが綺麗で昼の海とはまた違った魅力がある。

しかし、そんな事に感心すらできない空氣だ。

『何…？話つて』

決してラブコメではない。

「お前…なんで俺の前でも舞と仲良くなっちゃがるんだ？」

やつぱりね…。どうりで俺に対しても冷たいわけだ。

「しかも第一話で舞と一緒にしている…」

そこまで知つてんのかよ！

『いや…あれは、舞が勝手に乗つてきただけだし断つたら殴られたし…リヨータもすぐ殴られて大変だろ？』

ハハハと笑う俺に対しリヨータは眉一つ動かさずに睨み付けてくる。

「俺は舞に殴られた事など一度もない。それどころか舞が人を殴るなんて聞いた事もなかつた。…なのにお前を殴っていた。舞にとつてお前は特別な存在なのかもな…」

やつぱり妬いてたんだな」いつ。

『安心しろって！舞とはただの幼なじみ。俺は舞に恋愛感情を抱いた事なんかガキの頃だけだって』

「…フツ、舞と回じ事言つんだな」

…え？

あいつもガキの頃は俺の事を…？

「ああー！駄目だ！…ムシャクシャする…おこー！」

そつまつてココロータは構える。

『ああ、ちゅうじだ俺もムシャクシャしてたんだ。このままじゃ毎晩のように枕元にあの家族が立つかもしれない…ってなー』

「…フツ、いくぜー」

多少強引な展開から始まつたりヨーダとのタイマン。リヨータは勢いよく鋭い右ストレートを撃つてくる。

暗くて視界が利かないが、俺はリヨータの右ストレートに左手をとえる形で受け流す。

隙だらけの顔面に視角から左フックを繰り出すがしゃがみ込まれて、かわされてしまった。

(「こいつ……できるな）

気迫で押されでは負けである。俺はしゃがんていのココータヒロー
キックを繰り出す。

「パン」

（下段払い……？）こいつ、空手使いか！？）

よく見れば構えが組み手のようになつており決まつてこる。

俺には格闘技の心得がないため経験者に勝つのは厳しい。

ヤバイ……と思つた瞬間、手刀が飛んでくる。

『…くつ』

かろうじてかすつた。…が、洋服の腹部のあたりが切れていた。

（…マジかよ）

勝つには一撃で倒すしかない。あいを狙つ！

俺は一気に距離を縮めに前に出る。

リョーダが正拳づきを放つ。

威力が1番小さい場所……拳を引いた所まで身を寄せせる。

『…ぐつ！』

くらいたいほしたものの勢いがない所まで身を寄せればたいしたダメージはない。

(…も、らつた…)

俺は身をかがめ、あご田掛けてアッパーを繰り出そうとしたが…

（ズキュー）

ええーー…銃声！？

ピタリとあご寸前で拳が止まる。しかし、これで格付けは済んだ。

「急に二人共いなくなつたからこんな事だらうと思つたわよ」

俺達の足元にかかるかぐらいの絶妙なコントロールで撃ってきたのは舞だった。

…例の火器付きショットガンで。

「リコータ…説明して？」

「別に…ただ、なんでこいつは殴るくせに俺は殴ってくれないのか
？…つて」

いやいやいや、それじゃあ君、Mつて誤解されちゃうよ？

「好きな男を…殴れるわけないじゃない」

つまり、俺の事は嫌いなのね。

「舞...」

『おい、お前らー！イチャつくるはいいけど...』の砂浜に波きてつる
『！』

（チュー）

おーーーーーい！

人前だぞ！？

コメディーだぞ！？！？

（ザーン）

（ん？）

「あ……」の海、真夜中になると満潮がくるんだわー。」

「あ～あ…しょうがねえ、戻つか！」

慌てて旅館に戻った俺達。

「明…悪かったな」

『気にはんなつてーでもまあ、俺の勝ちだつたな』

「あー…? あんなアッパー、ギリギリでかわせてたね!..」

『無理無理ーあの攻撃はあそこから加速して時速200キロに達するんだもんね!..』

「バカ野郎!俺の首の動きは210キロの速度で動くもんね!..」

「ズキュー

『さて…お風呂でも入るうか、リヨータ君』

「やうだね明君…僕が背中を流してあげるよ!..」

こいつしてなんとかリヨータの誤解も解けた。

「あれ?」

この部屋って男一人だつたつけ？

まあいいや、どうにかなるだろ、つ。

第1-1話　—オラ匠 なんだい？今日は僕が主役かい？—

「ガバゴボ… ガバゴボ！（助けて… 助けて！）」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！

ヤバイよこれ…！

あ、 オラ匠

… 明、 ツツコミ（助け）に来いよ…。

結局、砂に埋められっぱなしで動けないままみんな帰りやがって…！

なんで潮が満ちていくんだよ…。

息が… できな…

（一方こじらは例の家族）

「パパあ～夜の海つて誰もいないんだね

「…そうだな」

「ママあ～来年も絶対来ようね

「…」

「ねえ、なんでパパもママも泣いてるの?」

「『メン』、『メンな!』パパがあの時……あの青年に勝つていれば……」

私はなんと情けない父親だらう。自分の会社での失敗に家族を巻き込んでしまつなんて……。

「あなた……そろそろ行きましょう!」

「……そうだな」

「パパ、ママ……どこへ行くの? そつちは海だよ? ねえ!」

もう死ぬしかないんだ……もう……。

「ゴジン~

……ん?

足に何か当たったぞ?

石……じゃない!!

人の頭だあー!!

「おい、君ー!」

「ガバ……ゴ……ボ(助……け……て)」

「大変だ、何と言つ事なんだ！まさか私達以外にも自殺を心見ている人がいるなんて」

「ガバ…ウ（違…）」

「こんな…生に対する未練を絶つ死に方をできるなんて…なんと勇敢なんだ…！」

青年は首だけを砂から出す形になつてゐる。きつとよほど辛い事があつたのだろう…。

いざとなつて逃げ出せないよつとしている青年に対し、私達はなんと情けない…！

迷つのはもうヤメだ！

及ばずながら私もこの青年の隣で一生を終えよ。

ヽザクザクヽ

「ガバ…ヌオオオー！ハアハア…」

し…しまつた！

この青年がまさか横たわつて埋まつてゐるとは思わなかつた！

「うしょ…せつかく彼が死を決したのに私が助ける形になつてしまつたぞ…」

「あ…ありがとうございます…」やれこます！」

「ゴメンなさ……え？君は死のうとしたんじゃなかつたのかね？」

「まさか…こんな所で死にたくないですよ…でもおかげで助かりました。すひーく苦しかつたんですよ」

「すひーく…苦しかつた？」

「いやあ～死ぬつていつも溺れ死には絶対したくないですね！」

溺れ死には…嫌？

「生きて良かつたあ～」

生きて…良かつた？

「ヒルで…家族そろつてビーチしたんですね？…まさか」

「はい、家族で死のうと…」

「駄目です！絶対駄目！…世の中ひとつ良い事ありますって…とにかくほら、潮が満ちて来ました。早く離れましょう」

（海岸沿いの階段）

「何があつたんですか？一家で自殺なんて…」

私は青年と一緒に階段に座り込んだ。

子供と母親は旅館に戻した。この青年との出会いで何かが変わるか

もしれん。

その奇跡を信じたかつたから、死ぬのは後でもいい。

「あ…君の方」モーなぜ埋まつてたんだ！？私達がいなかつたら本当に死んでたんだぞ？」

「埋められたんですよ！明つて友達に…」

…明？

明…明…明…明…あ……………！

優勝賞金をかいつた例の悪魔があーーー！

「私達が死を決意したのも…明という青年が原因だ…！」

「な…！明が？明が何かしたんですか…？」

「まあ…彼に勝つていれば賞金を手にできて…なんとか首が繫がつたんだが…。つてか彼は本物の悪魔か？君の事をほつたらかしにしてたんだろう？」

「まあ…あいつの事だし、どうとかなると思つていろんでしょうね

どうにもならなかつたら、どうするつもりだったのだろうか…？

「なんとか…あの悪魔に一泡ふかせてやりたいな…」

「そうだ！明はあなた達家族も…もしかしたら僕も死んでると思つ

てるわけでしょ？だつたら真夏の心靈ドックリでもやつませんか？」

「おお！それは良いアイデアだ。次回が楽しみだな」

第1-2話～前回でオチ言ひ切らつたるよな、まあいいや～

『スゲー！旅館はボロいへせこの温泉にはこだわってんな』

俺とリヨータは汗を流しに風呂に来ていた。

残念な事に女性陣は俺達がタイマンを張つている間に入つてしまつたため秘密の花園を覗く事ができなかつた。

『ほれ、背中流してくれんだろう？』

「…ちつ、しゃあねえな」

うん、匠とはまた違つた男の友情が良い……

あー！

そういや匠どうしてんだろ？

…まあ、死んでは…いない…よな。

／ガサガサ＼

『つかつかー』

「なんだよ明、木が揺れただけだつて

『ハハハハ、僕はビビつてなんかいないよ?』

「…あ、あの木に例の家族が首をつって…」

『それは見間違いだよりヨーダ君。いいかい？これは数字のトリックなんだ』

「何言つてんだよ、嘘に決まつてんだろ？」

くつそおーリョータの奴ビビらせやがつて…。

この俺が世界で、舞とチーズの次に怖いのが、ゆ…幽霊なんだよね。まさか…匠もあの家族も死んじゃって…本当に枕元に立つなんて…ないよな。

これは「メテイーだ。ホラーではない。

『それそろ出ようか』

「は？…さつさしこ入つたばかりだろ？」

温泉 水 海へ身投げした家族…

駄目だ駄目だ、早く出なくひや。

「あの家族も…今頃は温泉じやなくて海の底に漫かつて…」

『何を言つてるんだリョータ君。いいかい？これは数字のトリックなんだよー』

「出たいなら一人で出なよ。俺はもうちよつとゆつへつしてから…」

『バカ野郎！すぐ出ないと今にあの家族が…』

「だつて俺パパさんに負けたもん。怨まれんなら明だろ？」

『薄情者――!』

俺は一人でトボトボと部屋に戻る事にした。

『ちくしょう…もし俺が死んだらリヨータを怨んでや……たー匠！？』

部屋の前にずぶ濡れの匠が立っていた。そう、じっと立っているだけ。ドアの前に…決して部屋の中に入ろうとはせず…。

『たく…み？』

呼び掛ける俺と田が合つた。真っ赤に充血している。これは海の潮でか…それともミカンの果汁でかは分からなかつた。

匠はニヤリと笑うとスーっと部屋に入つていった。

『ちょ、待てよ』

キ タクに憧れている俺の呼びかけに反応すらしてくれない。

匠の後を追つて俺も部屋に入るが…部屋に匠の姿はなかつた。

窓は開いているが…はー階だしドアはコンクリート。飛び降りればケガはするだろ？。

『ハハーン…さては驚かそうと思つてどっかに隠れてるな
俺は押し入れから隅々まで隠れられそうな場所をくまなく探したが
…いない！

『ハハ、マジかよ…』

「ガラガラ～

『ヒイイイイイー！…』

「なんでスパイダーーンのポーズ！？」

…なんだ、リョータか…。

『今…今、匠がこの部屋に…』

「何言つてんだってお前」

「皿を閉じれば億千の星、

「お？携帯が鳴った。…ほら見ろ、匠からだよ」

『で…出ない方がいいって…』

「はい、じゅら夜逃げ屋本舗。」

どんな出かたしてんだこいつ…

「ん……おーい? もしもーし? ……切れちゃった

『な……なんだつて?』

「ん~なんか、明あー! 明ああーって言つてた」

「これヤバくない?

…「うー!

ヤバイ、ト……トイレに行きたくなつてきた。

『メツチヤイケメンのリョータさん、今ならなんと先着一名様まで
水着ギャルに囲まれてハーレムになれるイベントがトイレでやつて
るらしいよ さあ、競走だ!』

「マジ? 行くしかねえな!」

『だひ~さ、早く

「でも俺、舞いこむし。ここは君に譲るよ。こいつらつしゃい、一人
まつりでトイレへ

『だひくじょ———』

分かっているせ、所詮リョータは口だけが達者なんだ。

道端とかに口が落ちたら『おー! リョータじゃん』って勘違いしちゃうぐらーコアいつは口が達者なんだ。

「𠂔𠂔𠂔」

ぬおおおー！

何、
今の声？

ペチヨン

うわ、足で何か踏んじやつた……つて口……！？

なんで廊下に口か落ちてんの？

ハケハケ

『ひいやあああーーーーー』

「おい、どうした明!?」

『めえ口べらにちせんとおおとがー!』

「何言ってんだよお前！？」

リョータにはちゃんと口が付いていた。…とすると、あの口は誰の
なごだ?

「いや、普通口とれないから」

『本当にあつたんだって！頼む、もう漏れそうだ。いつしょに来て

くれ

もつこの際プライドだらうがなんだらうが関係ない。

「何もないぞ……？」

バ、バカな！

わつき確かにここ二人の口が落ちていたの。

「ペラリすぎて見間違えたんだろう？」

『……つづ…もう限界だ！』

俺はトイレまでダッシュした。

（幸せと生きてくる意味を味わっています）

『フウ～、間に合つたあ。つたぐ、なんで部屋にトイレがないんだよーボロについてのも考え方のだな』

なんて愚痴を言つてゐる

（ペタ…ペタ…）

足音…？

『つゝ、つゝータ？』

そう、俺はダッシュのあまりつゝータを置いてしまった。

「ペタ…ペタ~

ああああ足音が…ぬぬぬぬ濡れる…?

「ピタ~

いや止まるなよ!

「ふ、く、も、…あ、の、と、ぞ…」

『いやああああーー』

そこで俺は氣を失った。

田が覚めると部屋にいた。

リョータ…舞…正美…友美ちゃん…匠…

匠!?

「ハツハツハツ、ドツキリだよ、明」

匠がカラカラと笑っていた。そして…例の家族も。

『あんた達…生きてたんか?』

「まあ、この家族に助けられたって感じかな。だからほら、賞金はあげなよ」

『ちつ…分かったよ。本当に化けて出られたらたまんないからな』

俺は家族に賞金を全額渡した。しかしドッキリで良かつた。

『手の込んだドッキリだな…本物かと思つたよ。』

「ハハハ、まず、二二階建てだろ?」この部屋の真上がこの家族の部屋なんだ。明が来る前に上からロープを垂らしてもらつてそれで上つたのさ」

だから消えたように見えたのか。

「まあ、トイレに行つた明を脅かすなんて簡単だな」

「私の足を濡らして歩けば良いだけだからね」

くそおーなんかパパさんの口調がムカつくぞ。やつさまで死のうとしてたくせに…!!

『まじつたよ…でもあの落ちてるロープをせつたんだ?妙にリアルだつたぞ?』

「口…? 何それ?」

『は?だから…廊下に落ちてた口だつてー』

『いや…私と匠君が仕掛けたのは一つだけだが…?』

…まさか、本物の…?

みなさんも真夏の夜にはお風呂をつけて…

第1-3話「まだまだ俺達の夏は終わらない」

『イヤツホーイ』

「ザバーン

今回もビキニのお姉さんがいつぱいですね。

そう、俺とリョータと匠の男三人でプールに来ている。

「なあ…なんで舞とか連れてこないんだよ」

「ブツ、リョータつたら」機嫌ななめだね。

『だつて前回でみんなの水着姿見ちゃつたし今日の気分はお姉さんつて感じだしい』

「なんだそれ！俺はもつと…あ、いや…」

『もつと何？舞ちゃんの水着姿を見てたかつたのかな？』

「うわせえーそんなんじゃねえよーーー！」

初々しい奴だな、顔を真っ赤にしちゃって。

俺達は中学生以上しか入れない深いプールのパラソル下に荷物を置いて水着に着替えた。

ここなら人が以外に少なく喫煙所なのだ。

…え？

うん、まあ今時の高校生なり煙草ぐらご当然でしょ？

「あ～ヤー切れだケロ～」

ほひ、隣のケロケロ煙つてるギャルも高校生なのに煙草を…ん？

ケロケロ…？

「あー・タクミン達も来てたのー？」

「おお 正美じゅん」

…へん、なんで正美がいるんだよ。おれか舞と友美ちゃんも？

「マイチヒトモミンは今日いないケロよ？ウチの中学生の頃の友達の水^{みず}晞^{アキ}といっしょに来たんだケロ～」

「はじめまして、水晞です」

結構可愛いina、少し長い髪は綺麗なストレートで目がパツチリして
る。正美の友達にしてはそんなにギャルじゃなさそうだし肌も白い
方だ。

「んじゅ みんなでウォータースライダー行くケロ～

「おおーー..」

なんでこいつなんの？

今日は綺麗なお姉さんをナンパするつもりで来たのに…。

「ザアアア…バーン…」

速っ、ってか長っ…！

こここのウォータースライダーは三種類あって、俺達は一番高い所に来ていい。

頂上から下までは真っ直ぐなストレートでスピードもかなりのものだ。

しかし…俺はなんでリヨータと一緒にいるの？

なんで匠は女の子と下で待つてんの？

「あああ明、ふふふ震えてるぜ？」

『いや、これは怒りで…あれ？もしやリヨータ君。ウォータースライダーは苦手なのかな？』

「馬鹿な事言つてんじゃねえ！俺はMAX75キロ出るんだぞ！」

『じゃあ、賭けやろうぜ！先に下着いた方が勝ちね 負けた方は罰ゲームで、もみじだかんな！』

もみじ…それは背中にパンと平手打ちを食らわして手形がもみじ

のよつこなる事からそつ呼ばれてゐる。

「……え？」いや、それまではうつと…

『監視員さん、笛を』

۲۰۷

勢いよくすべり落ちる俺達。速度を上げるため、空気抵抗を受けないよう¹に顔は上げずに寝そべる。鼻に水しづきが入り少し痛いが我慢だ。

「ひいいいい」

隣のレーンからはリヨータの悲鳴が聞こえた。

結果は言わずとも俺の勝ちだつた。

『ニニイータ...ルムニシキ』

パン

「いってええー！」の野郎」

怒っているが背中には、くつきりと俺の手形がついているため情けない姿である。

『ん？ もう一回やる？』

「当たり前だ！ 負けたままで終われるか！」

リョーダは負けず嫌いだから乗せるのが簡単だな。

『じゃ、負けた方は翼ね』

翼… それは両手で平手打ちを食らわす事で一つの手形が翼のよいつなる事からそう呼ばれている。

「え… それはちよつ…」

（ピーー）

『しゃああああ…』

「展開早過ぎ…」

つてな感じで一時間以上繰り返し、結局リョーダは一回も俺に勝てず、背中は新・耳ぶく〇みみたいに手形でみっちりだった。

「明君つて速いんですね 水暁もすべりたあーい」

匠とゲロゲロは一人で昼飯を行いに行ってしまったので俺と水暁と新・耳ぶく〇の二人でパラソルに戻っていた。

『いやいや、相手が弱すぎるだけだよ。弱い者イジメしたって笑い

話にもなんないしね』

「明…てめえ」

「お待たせだケロ　はい、みんなの分」

匠達がみんなの飯を買つてくれたが、その前にやらなくてはいけない儀式がある。

『俺が足をもつから、リョータは手を…』

「了解…」

『ガシツ』

「ん、なんだい?一入共、僕の手足を持つて…ハハハ、これじゃ身動きができないや。ちょっと…!ねえ!—!」

「なんで俺様があんな怖い思いしてんのにお前は女と…」

「まさか君達は僕をプールに投げるつもりなのかい?」

『いぐぜフヨーター!セーの…』

『ポイ』

『ヒュ――――』

『コウ――――』

「長い長い…どんだけ投げてんだよ」

ヽ……ベチャヽ

「投げる方向…逆だろ…」

『テへ「うつかり明でした』

さて、儀式も済んだし飯でも食つかな、匠の分まで。

「ちっ、煙草切れちまつた…ちょっと買つてくれるわ

『リョータ、それなら俺のマルメンやろうか?』

「メンソールなんか吸えるかよ、男は黙つてセッターだろ」

『ああそうですか!…いつてりつしゃい…』

つたく…すぐリョータは氣取るんだから。やっぱ口だけ達者な奴だ
ぜ。

ヽブーブブブーンヽ

うるせえな…うわっ、なんて場違いなヤンキーなんだよ。フェンスの外側では原チャリをノーヘル二ヶツで走り回っている奴らが六人くらいいた。

あれじゃ今から来る人達に迷惑だろ…警備員は何やつてんだよ!

『プールに入る金もなつてか?あんな事してて親に悪いと思わな

いんかねえ』

「なんか恐あい…」

『大丈夫だつて水暉ちゃん。さ、飯も食つたしプール入るつぜ』

『もうだケロ～ほら、行くよタクミンー』

「お…おひ」

その後俺達はプールに入つてビーチボールを匠に当てたりだとか、匠のゴーグルをカチ割つたりだとか、ビーチボールを匠に当てたりだとか、ミカンを匠の頭の上に乗せたりして遊んだ。

「いや、俺可哀相すぎでしょ！？」

『…』してもリヨータの奴遅いな。あいつ方向オンチだつたつけ？』

「タクミン、迎えに行つてあげなよ、ウチと水暉で待つてゐるから』

「そだな…行くか、明」

『お…おひ』

俺はこの時、なぜか嫌な予感が走つた。

何もなければいいが…。

第1-4話～やつぱり男は黙つてセッターでしょ～

「えつと…「わーなんだよ、セッター売り切れかよ…しうがねえ…外の自販機まで行くか」

…ん?

おひ、俺はリヨータだ。今日は俺視点でやつてくれぜ

プール内の自販機に煙草を買いに来たんだけど売り切れでした、つてノコノコと帰れねえしな…外の自販機まで行くしかないか。

「すいません、自販機行きたいんでちょっと外出でもいいっスか?」

「ああ、別にいいぞお」

なんてやる気のない警備員なんだ!!

ここでのプールの警備大丈夫か?

♪ブーブブブーン♪

うわ、場違いなヤンキー発見。つてかなんか注意しろよ、警備員…!!

「ねえねえ俺達、今お金なくて困つてんだよねえ～ちよつと貸してよ」

最悪だ、絡まれた!

相手は六人か…ヤバイな。原チャにノーヘル二ヶツつて激アツだな
こいつら。

全員ほぼ髪色が変だぞ?

赤とか金とか紫とか…つてか学校とか行つてんのかこいつら、歳は
タメか一個上だな…。

「シカトこいてんじゃねえぞコラアアー！」

なんて考えてるつむりに徐々に口調が悪くなるヤンキー達。

「ちょっと面貸しな ヒヤハハ」

（木に囲まれた場所）

つたく…うぜえ奴らだ…。

「くつ…つまお…」

（ドグシ…）

…よし、あと四人。

「おい、こいつ強いぞ！いいね…楽しいねえー！」

こいつら、狂つてやがるぜ…。人を殴つて快感を得る連中か…。特にこの連中のリーダー格の男は体型がいい、昔ボクシングあたりをやつてただろう肉体美だ。

「遊びはおしまこ……抑えろー。」

そのリーダー格の男の合図と共に残った三人が同時に飛び付いてくる。

「俺の体にしがみついていいのは……舞だけなんだよー。」

一人は払つたが一人に腕と足の自由を奪われた。

「へへ、素直に金出せばいいのものを……くらえー。」

「ドグ〜

「ぐはっ」

リーダー格の男の正拳が俺の溝にヒットした。

「おうおうーーー。」

一撃で立てなくなつた俺は袋だたきになつてしまつた。

最初に倒した奴らも回復して、六対一のまさこピンチである。

「おい、もう終わりか?」

「悪いいな……俺はMなんだよ……」

「くたばれーーー！」

「やられるつーーー！」

「ガシツー

『てめえら…何やつてんだ?』

明と匠か…ナイスな奴らだぜ。

『まつ、食後の運動だな』

「氣をつけるよ明ー…そいつ、格闘技をかじってるぞー!」

いくら俺に勝った明でもこの人数相手じゃ無理だ、絶対勝てない!

「心配すんなつてリヨータ、君は知らないだろ?ナビ…明は…」

『「つおおおお…』』

「明は一年前、リューファの…元ヘッドだった男だ」

リューファのヘッドだと?

確かにピークだつた頃が一年前、明が住む地域一辺を齧かした伝説の族のヘッドが…明?

「匠、本当か?それ…」

「ああ、今はもう引退したけどね。ある事件が原因で…。だから明はこういうヤンキーを許さないんだろうな」

へつ、安心したのか…?

『気が遠の……』

-----。

「はつ……」

『お、気がついたカリヨーネ』

「何は？パラソル……？お前！一人で六人も！？

『まあ……余裕でしょ 今みんなでジュースでも買つてくれるって言ってたから、もうちょい寝とけって』

明が元ヘッドか、まさか六人相手に勝つとは……。

『ほりよ、煙草切れてんだる？やるよ』

『マルメンか……ちょうどスッキリしたいところだつた』

たまにはメンソールも悪くねえな。

「明……お前、元……」

『それ以上は言つな』

「あ……ああ、悪い。あと……ありがとな」

『おひ』

やはり何か過去にあったのか、ついつて確かめる気はないが…

「あ、リヨーダンが起きてる もおーダメじやない、煙草買つてる所を警備員に捕まつちやー！」

「…え？いや、俺はヤンキー…」

『全くだよ、リヨーダンに絡まれちやつて必死で謝つたもんな』

「は？…え？」

訳も分からず戸惑つ俺に明と匠が田で合図をしてきた。

(さつきの事は内緒だぞー！)…と。

「あ…いや、ハハハ。 そなんだよ、俺つて童顔だからかなあーハハハ」

明はヤンキーとかに異常なコンプレックスらしこのを持つてたつていい。

明の過去に何があったかはどうだつていー。

ただ、ずっと友達でいられるなら…

それでいいんだろ？。

番外編～俺の過去に何があったかって？君も物好きだな～

「「めんなさい…」めんなさい…」

『絡む相手を間違えたのが運の尽きだな』

「知らなかつたんです、あなたがまさか明さんだなんて…」

『田障りだ…消えろー…』

「まんねえ…ありきたりな毎日。高校に入つたつて何も変わらない。クラスの奴も喧嘩は弱いし根性がある奴もない。俺に逆らつてくる奴すらいないなんてな。」

まあ当然か、高一でリューファのヘッドだもんな。

いや、そういえば…俺に普通に接してくる奴が一人いたつくな。

「あつきら～あつはよ～」

こいつだ。朝っぱらから馬鹿みたいにでかい声で挨拶をしてきたのは大島おおしま智則ともりだ。同じクラスでなぜか智則だけは俺になついてくる。

「お、お…早く行こひよ、智則…」

智則の後ろで俺の顔を見てじじつてる奴は…確かに匠とか言つたな。

「んじゃ 三人で行きますか！」

『いや、俺今田は学校サボるよ』

「ええ～？俺なんて皆勤賞狙つてんだぜ？」

皆勤賞とか中坊でも喜ばねえよ……もひ高校生になつて半年も経つのにまだまだ餓鬼か…。

「智則、早く行こー電車来りやつよ」

「分かつたよお～。明！遅刻しても来いよー」

俺は片手を上げて奴らの前を後にした。

駅の地下にあるゲーセンで暇を潰す。先客は学校をサボり、リューファの一員である連中がほとんどだ。

いつもぐだらない不良仲間。しかし、リューファというグループのヘッドである以上、下の奴らの前では常に威厳を発しなければならない。

しかし、いかにアの奴らと言えども年上の連中ばかり。

いつまでも俺の下にいるなんて限らない。ただ、喧嘩が俺より弱いだけ。

「へへ、なんで」「このつのはつ事なんか聞かなきやなんねえんだよ…」

なんて小言はしおりながら聞こえてくる。

『なんか言ったか？和也さん』

「いや、何でもないっスよ」

和也^{かずや}と言つ奴はリューファで二番目^にの実力者であり、一つ上だ。

今まで誰にも逆らわれず生きてきた和也が年下の俺に敬語を使い、何より喧嘩が勝てないと言うのに腹が立つのだ。う。

俺がいなければリューファを仕切るのも和也だしな。

「明さん！駅八番線の便所で仲間がやられました！」

腫れた顔で報告に来たのは同じ年の拓哉^{たくや}だった。きっと喧嘩でもしたのだろう。

拓哉はリューファの中ではちゃんと学校に行っている奴で、八番線と言えば拓哉が乗る電車から一番近い便所だ。

「いつも通り煙草を吸つて、一人組の奴らに絡んだんですけど…片方の奴が強くて三人がかりでやられまして…」

『和也さん…行きますよ』

「へいへい、お前ら！行くぞ！」

俺を含めてゲーセンにいたリューファの一員四人で例の便所に向かう。

三人がかりに勝った奴なんて相当強いと期待していたが…

俺達が着いた頃にはそいつは既に床に屈していた。

とはいって倒れているのはリューファのメンバーも二人。

俺達より早く加勢した一人に倒されたのだろう。

ここのは便所は以外と広く、一番奥のホームから近いためか、さつき電車が出たばかりのためか、あと一時間以上は人が滅多に来ない。

『もう終わったのか、たつた一人にてこずりやがつて……おい！』

俺は倒れている奴の髪を引っ張り顔を覗いた。

『…と、智則！？』

そこにいたのは智則だった。

「へへ、皆勤賞…逃しちまったよ」

なんでこいつなんだ？

「この野郎！」

和也が智則を蹴り飛ばす。智則の鼻と口からは夥しい程の血が出ている。

『やめろ和也さん…もういいだろ…』

「まだだよーせっかく来てやつたんだ、殴らなきゃが済まねえ。

お前らもやれ！」

和也が一員に声をかける。もつ智則は動けないと三つの口袋だとき。

「ほらほら、リューファのヘッドであつ男が見学ですか？明さん

「あー！」

『…めた』

「あ？」

『たつた今、俺はリューファをやめた。』

「つじことま俺がヘッドって事でいいですね？お前らーみんなで明
も潰せー！」

くくく、五対一か…。

でもな、智則は友達だ。ここからは全員許さねえ！

-----。

ハアハア、さすがに厳しいな。拓哉は俺に勝てないと察したのか腰
が引けてこるし、和也は俺が苦しむのを楽しんで見てこる。

おやりく俺がバテた所で出でぐるのだろう。

三人相手に俺は死闘を繰り広げたがさすがに限界だ。

「そりそろ疲れただろう、お前らビケー俺がケリをつける」

この状態で和也が出て来てしまってはタイマンでも勝てない。

もうダメか…そう思つたその時だつた！

「お前らー何をしているんだ！！」

駅員が駆け込んできた。後ろには匠がいた。おそらく匠が駅員を呼びに行つたのだろう。

結局この事件が学校にバレてしまい、俺は一週間の停学をへりつた。停学で済んだのはリューファを辞めていた事と智則を守るための不可抗力として認められたためだ。

現場にいたリューファの奴らは学校に席が残つてゐる奴は退学。

さらに全員補導された。

智則は…と頭の打ち所が悪かつたため緊急で手術をした。

命に別状はなかつたが…記憶喪失になつてしまつた。

とは言え、今までの事を全て忘れたというわけではない。

言葉の理解能力が欠けてしまい、思うようにしゃべれないのか、海外まで治療に行くため俺の前から姿を消した。

仮に元通りしゃべれるようになつても決してこの街には帰つてこないだろ？

匠はすつと泣いていた。友達を守れなかつた事、己の非力を語つた事。

しかし、それは俺も同じだつた。友達一人守れなくてどうする？

これから俺に何ができる？

停学中の一週間、家で悩み苦しんだ。

停学が解消された日、家を出ないと間に合わない時間になつても俺はまだ部屋にいた。

正確に言えば、今日ほど学校に行きたくない日はない。

周りの連中は何と言うだろうか…俺が仕切っていたチームの奴らに友達を消されたんだからな。今まで以上に冷めた目を浴びるだろう。

重い足どりで玄関を開ける。

「あ…おはよー！」

門の前には匠の姿があつた。一番怨まれる人間。

大親友を失つた人間。

そんな匠に俺はどう接すれば良いとこりのだ…。

「遅刻しちゃうよ?」

『また…サボるつかと思つて…』

この台詞も口癖のようになってしまった。智則に誘われたあの日だつて、俺は学校に行こうとしていたんだ。

ただ、人と馴れ合つのが嫌いで、素直じやない損な性格。

「ふざけんなよー。」

今まで根性がない、ただのビビりだと思っていた匠が意外な言葉を発した。

「責任…とれよな!」

『ああ、責任か…分かった。俺はこの街を出ていく事に…』

『だからふざけるなよー。そんなの逃げてるだけだろ?』

『じゃあ…どうすればいい?』

匠は下をつむいて、俺の目を見た。こんなに真っ直ぐな目で見られるつづこ氣落ちしそうになつてしまつ。

「俺は親友を失つた…だから…明君に俺の親友になつてもうつ…」

…え？

「ほ、ほら…早く学校行くよー！クラスのみんなには俺から言つとい
たから。明君は良い人だからって…」

俺は何を勘違いしていたんだろう。智則を守れなかつたのはあの時、
俺がいつしょに学校に行かなかつたからじゃないか。

ゆつくりしすぎて…気がついた時には遅くて…盗られるに決まつ
てるじゃないか！

これから毎日…学校へ行つてやる。次は匠という親友と共に。

「明君、早く！俺の親友はこれから皆勤賞を狙わなきゃ駄目だから
ね！」

『匠…ありがとう。それからな、親友だつたら君つけはいらねえ…
明でいいよ』

「そつか…よし、行くぞー明ー！」

『おつ、匠ー』

智則…いつか戻つて来いよな。その時は今度こそ、三人で学校に行
こめば。

第15話～おかえりなさい、智則君～

短かった一年生の夏休みも明け、今日からまた学校に行くために玄関を開ける。

「…よ、明。覚えてるか?」

『と…智則…?』

信じられない。一年前から消えた智則が…俺の家の玄関の前に…しかもちゃんとしゃべれている。

『な、なんで?大丈夫なのか?』

「まあ、海外の超一流の医者にかかるば後遺症もなく、これから普通の生活ができるみたいだ」

智則の父親は社長でこの家の家はムカつく程の金持ちだ。

きっとこの手術費用だって 億円はくだらないはずだ。

「じゃあ、明日からまた学校通つから、今日はあこせつだけだ」

『通つー?…あ、ああ、お大事にな』

「おつ

そう言い残し智則は帰つていった。しかし、あの頃のままの智則だ。

思い返せば前回の番外編で…

「ああきこ、ひあ～」

回想シーンもなしですか？

『なんだよ匠、朝からヒドイ顔して…あ、そういうえばやつせ…』

「今智則が来なかつたか？」

『ああ、来てたよ』

「バカモンーそれは変装したルパンだ！…追え、追ええ～！」

錢形つスか！？

『まあ無事でなによりじやねえか、それより早く学校行かないと遅刻するぜ？』

いつのまにかあと5分で電車が来てしまつ時間になつていた。

「何？それは真か！」

今日の匠のキャラはつかめない…。ま、智則が帰ってきたからテンションが上がつてるんだろうな。

「明、今日は始業式だけだから午前中で学校終わりだろ？帰つたら、『智則復活記念パーティー』やろつぜー」

『お、いいねえ』

たまにはまともな事を書いた。た。

「よし、決まり！」

そんな感じの会話で盛り上がり、教室に入る。まあ、直接関係ないとしても舞達も誘うかな。

始業式も無事終わり、放課後俺達は駅に集まつた。

こうして、俺、匠、友美ちゃん、舞、リョータ、正美の全員強制参加が決まったわけだ。

やる場所は智則にパーテイーの事を話したら快く自分の家を使ってくれと言つてくれた。

『んじゃ匠、俺達で酒を買ってこようぜ。舞とつまーたは晩飯の材料を、友美ちゃんと正美で調理を頼んだぜ!』

「…………」

あれ、「」が一つ足りない？

「あ、明？酒：俺達で買つの？」

何や、匠は乗り気ではない。言に出しつづけのへせに……

『当然だろ？匠、酒飲めるよな？』

「好きだけじゃ〜…」

『じゃあ着替えてコンビニ行くぞーー』時間後にまたこの駅集合で
は解散』

匠の奴、何か様子がおかしいな…。まあ、それは次回であきらかに
なるか。

第1-6話～明、匠組…お酒は二十歳から～

各グループとに別れて行動に入る。

俺と匠は近くのコンビニに酒を買いに行く事にした。

「あ、あ、明。お前、酒買えるのか？」

『あ？そりやまあ普通に…あ！もしかして、お前店員に止められる
んじゃないかビビッてるんな？』

「バ、バカ言え…今日で酒を買つのは二ヶタ突破だ…俺は『コンビ
二の狼』と呼ばれる男だぞ？」

…うん、こいつ確実に初めてだしビビッてるよね。

タバコの自動販売機でもいつつも周りをキョロキョロしてゐからな
…。

「ヤバイ！パートカーだ！逃げろー！」

いや、まだ買ったわけじゃないし…

「ふう…まいだか」

いや、すれ違つただけだから…

こんな調子で大丈夫かな…でも、匠に買わせるのも面白いかも

「ウイイーン~

「こりゃいませえ~」

愛想の良い笑顔で迎えてくれる店員。この壁間に「フリーター」と思われる二十歳前後の若い女人と、厳しそうな顔付きの店長と書いた名札を付けた人の一人で営業していた。

『やっぱチューハイビールと…やっぱ枝豆は欠かせないな…』

「は、早くしろよ明日から店長がこいつ見てるぞ!」

ふう…やはりビビッているのか、匠…。

『あー財布忘れちゃった!悪い、匠がこれ買つてくれないかな?』

もちろん財布を忘れてたなんて嘘である。

『え…ちょっとマジで?』

『さ、早く早く…』

…一ヤリ

しかもわざと店長のレジへ押し付けた。

…一ヤリ

「う…これトモコ」

別に言わなくつたつてか」に入つてるんだから…

「お姫様、お若い様ですが年齢の方は…？」

あ～つと、引っ掛けちゃったよ匠くん！

「ふつ…まだある？」

「じゅ…十八歳だ！」

……匠、

そりや A\だ…！

「未成年の方には…ちょっと…」

「あ匠、このピンチをどう切り抜ける…？」

「で、ですよね…『メンナサイ』

謝つたあ――――！

いつもして結局酒を貰えなかつた俺達だつた。

「ふつ…まだたか」

まだ言つてやがる」こつ・

第17話／舞、リヨータ組…スーパーでバイトしていましたが何か？

何にしようかなあ。

あ、初めてまして

今回は私、舞視点でやってきますね。

今は私とリヨータで駅から近いスーパーに来ています。

何でも、夕食の食材の調達などと言つかったるい係を任せられちゃつたわけです。

「…で、何を買っていけば良いんだ？俺はこういう奥様ばっかりいる所は好きじやねえ」

『私、だつて嫌よ…』

現在時刻は3時。お昼も過ぎて空いてるんじゃないかと思つていたのに、まだ店内は賑わっているわ。

その理由は…たぶん田の前のあの人だかりね。

「はーい、いらっしゃいませえ！ただ今より、タイムサービスで高級霜降りが千円から~千円から販売しています」

…これだわ！

聞いた話じや智則の家はムカツク程の金持ちだつたわね。私達が買つた市民の料理なんか見えるかあ！なんて言われたくない。

『リヨータ、任せたわ!』

「マジ! ? だつておばちゃんと主婦達の形相が偉い事になつてるんですよ! ?」

『いいから行きなさい! その間、私はこの試食品のメロンを喰らうわ』

「今時の女子高生が喰らうつて……ああもう、分かつたよ……」

それでいい。残った骨は、ちゃんと拾つてあげるからね。

-----。

リヨータだ、フツ、舞がメロンを喰らつてゐるし、俺が人だかりの中に入りこんで見えなくなつたため、ここからは俺様視点でやっていくぜ。

「ええ~ 残りあと十個~ あと十個… イタ、お… 押さないで…」

それはもうみんな凄い勢いで販売員のお兄さんも参るぐらいだ。

すでに目の前には軽く二十人はいる。この瞬間、十人以上は敗北の涙をする事になつちました。

いや、急げばまだ間に合つ。なにせ相手は四、五十のオバちゃんんだぜ?

どう転んでも現役高校生が競り合いで負けると思つ?

しかしなあ……なんで俺様はいつも運が悪い……？

俺様の足元には六十代の白髪のばあちゃん。この混乱で腰を痛めたのか疼くまつていてる。誰もこの状況に気付いていない。

いや、気付いたとしても、どうかの他人のばあちゃんなんかよりも肉が優先の世界なのだろう。セコイでここの世は残酷なのだ。

「うう……孫が、孫が待つとるんじゃ……腰が悪いのに孫の誕生日、じゅうからと言つて、こんなババアが来たのは無謀じやつたかのう……うう」

などと、痛がつていい割りにほしつかりと脚本でも用意しているかの様にすりすりじゅぐるばあちゃん。

I(1)で俺には一つの選択肢が与えられた。

A、ばあちゃんを無視！全力で肉GETの任務遂行。

B、ばあちゃんの手当てを優先。

(△△よ、迷う事なんかないわ。ためらわず… Aを選びなさい)

悪魔（舞）のわざわざが聞こえた気がした。

この瞬間に俺にAを選べと言つのか！？ ばあちゃんを見捨てても… 肉を取れとでも…！？

(つづけ… 忘れたのですか？ 明は、今のあなたよりも辛い選択に

も関わらず、最後の一囗をためらわなかつた。リョータが明に負けた理由…鬼になれないあなたはいつまでたつても…）

俺様は、明には…負けない…！

-----。

気が付くと俺様は右手に肉を持っていた。
どうやら無意識のうちにAを選んでしまったようだ。

「おつかれリョータあー…、?リョータ??

俺様はわざわざメロン喰らい終えた舞の出迎えを聞こえないふりをして、先程のばあちゃんの元へ向かった。

予想通り、接戦を終えた主婦達や店員が駆け付けていた。

『あの…、この肉、譲りますよ』

俺様は苦労して手に入れた肉をばあちゃんに渡した。

「つむ、じ苦労」

あれえ〜?

なんか反応がいくらか違つよねえ〜?

「いやあ～楽して手に入れるにほひの手が一番じゅうて。ヒヤハハハ

このクソババア…

気が付くと俺は…右手に持った地球儀を振り上げ、ばあちゃんに忍び寄っていた…。

第1-8話／友美、正美組…ハイ、ポーズ

「…………」

『…………』

どうしよう。と書いつよりも、何でしよう？
私達調理係で思わずOKしたけど、みんなが買い出しに行っている
間は暇なのね。

あ、申し遅れました。

今回の視点は私、友美でやつていきます。

もつほんと久しぶりの登場ですね。みなさん、忘れてないですよね？

まあ、作者がキャラ設定を詳しく書いていないから私達の顔なんて
想像できないでしょうね……。

「ねえ、トモミン」

『は、はー』

「暇だわ…せつかくだから、ウチらで遊び行つたりやおうよ」

『そ、そうですね。あと一時間以上もありますし、この（かんばし
駅）は色んなお店がありますしね』

と、言うわけで私達で遊びに行く事に決まりました。

私や明達が住んでいいるこの町は（かんばし町）と書いて、ビルや商店がかなり栄えている方だと思います。

だから、遊ぶ場所なんていくらでもあるし、今いるかんばし駅も広いからここを出なくつたつて暇なんかいくらでも潰せらるんです。

まず私達は地下にあるゲームセンターに来ました。

女の子がゲームセンターに来てやる事なんて一つ、

「プリ撮りつけ口」

まあ、定番ですね。

『あ、最新のプリクラ機が出でますよ～これにしまじょうか』

私と正美ちゃんは（チヨメクラロ×）とか言つプリクラ機で撮る事に決めました。

（こりひしゃいませ、機械が指定するポーズで撮ると盛り上がるかも）

お金を入れた後ナビゲーターとして流れる若い女性の機械音。

「面白やつけ口 カヨッといこれが言つ通りにしてみるケ口か？」

（カメラを見つめて気分はモテル気分 3、2、1…パシャ）

一枚目は片手を腰に並べてちょっとと氣取つて取つてみました。

(二枚目行くよ 1+1+1+1+1+1……つて、多いよー2じやないのかよ!アハハハハ マジウケるう~) ……パシヤ)

ええ——！？

ノリツシ パミー?

三でか何このアリ機！？

思わず驚いた顔で撮られました。

(はいはい、ちゃつちゃと三枚目撮るよ? もうなんか今日ダルいし
…早いとこ帰つて一杯やりたいし…はい適当に笑つて笑つて…)

ノミナ

いや、笑えないですよ？

しきなに態度変わったやつであるじゃないですか!!?

(おい、女子高生の時は俺に変われと言つてるだろ！)

(ちよ…急に出てこないでよ！私だつて生活かかってるんだから！
はい、もう一枚続けて撮るわよ？…パシヤ、パシヤ)

文
化
？

ナビゲーター一人いるううつてか喧嘩してるううつてか一枚続けて撮られちゃつたし…。

『正美ちゃん、このプリクリ機ちょっとおかしくない?』

「なんか、鬼やばいケロ」

(「え？怖がらなくていいよ、正美ちゃん。ああ、おじさんのが綺麗に撮つてあげるからね。ほら、もつと笑つて…そして脱いで…）

見えてるんですか！？

ナビゲーターが変なおじさんになっちゃったし。

『何か、まともに撮れないですね…帰つまじょうか？』

「わうケロね…」

（ええ～帰つむやつむつと撮つむよお…）

だからなんで聞ひえるんですか！？

私達は余りの氣味の悪さに途中にも関わらずゲームセンターを後にしてしまった。

後に知つた事ですが、チョメクラDXは設置してわずか一週間の内に、苦情が原因で廃除されたそうです。

第1-9話～エコノ智則君の家～

いやあ～久しぶりだ。なんか一話分も脇役の皆さん視点でやつちやつたからな。

と言つわけで、これからもこのスーパーースの明様がチョメディーをお贈りします。

わい、とつあえず俺達は全員駅に集合したわけだ。

しかし…もう駄目な奴らばっかり！

結局酒は買えないし、舞達は食材買つてないし。

そして何よりシシ「まなきやいけないのが…

『リヨーダーなんで地球儀なんか買つてんだよ…!』

「バツカ野郎！決してこの地球儀ではあちやんを殴りかかるうとしたところを、舞に殴られて店員に怒られてお詫びに買つちやつたわけじゃないからな！！」

成る程、よく分かりました。

それにしても、智則の復活記念パーティーに行くのに手ぶらって…

冒険者だな、俺達も。

まあ、いいや。智則の家で夕飯を作らせてもらひやつ。

-----。

かんばし駅から歩いて10分、そうたいした事のない距離に智則の家はある。

いや、これは家じゃないな、屋敷だな。

なんだよ、この広さは…小学校の校庭並の庭、四階建ての赤い屋根。部屋の数は大体20はあるな。つてかもう死ねばいいのについて感じだ。

「なあ、こんな広いなんて聞いてないぞ?」

いつも口だけ達者で気取っているリョータでさえ、目と鼻から大量の樹液を出して驚いている。

「いや、樹液は出でないから」

あ、そり。ゴメンね。

さて、こざ智則君の家へ！

「ピリリリー！侵入者発見、射撃班、重装歩兵は出動してください～いやいやいや、なんか敵つくておかしな人達がいっぱい出て来ちゃつたよ？

どこで手に入れたか分からない様な高価そうで頑丈な鎧を着た方がザツと数えて十人。

屋根の上や地面がパカッと開いたスペースやら色々な所からスロー
プ付きの銃を構える方達がたくさんいました。僕たちピンチです
に門開けてんのよー！」

『いや、つにしつかり』

「高校生六人発見、武器は地球儀と見られます。どうしますか！？」

『リョータああ！てめえのせいで敵だと見なされてんぞ！？どうす
んだよー！』

「仕方ない……お前ら、ソレは任せる。みんなー俺を置いて先に行け
え！！」

と言い放ち地球儀を構えるリョータ。

『リョータ…』

「明、決着はまだ着いてないんだからな……」

『……って、漫画っぽい事してんなよ……』

すいません、僕たちは智則君のパーティーをやるつと思つて遊びに
きた友達です。中に入つても宜しいでしょうか？』

「なるほど、坊ちゃんのお友達でしたか、わ、どうぞ中へ案内いた
します」

坊ちゃんって……智則の奴、どんだけの使用人がいるんだよ。

「ただし、この地球儀は預からせていただきます。」

重装歩兵の人はリヨーダから地球儀を取り上げた。まあ、当然だろう。

「お…俺様の地球儀い！」

以外と氣に入つてたんだ！？

「二万円もしたのに…」

高っ！！

通りで何も食材が買つて来れないわけだ。

「あ、言い忘れてましたが皆さん。この家中に対・泥棒用の仕掛けがたくさん用意されてますので、くれぐれも物に触らない様、お願ひします」

なんか怖いなこの家…。これだけの人がいるんだから冗談に聞こえない。きっととてつもなく大変な目にあって…ってか死んじやうかも？

「せ、どうぞ中へ」

ドアを開けると長くて広い廊下。家中なのに靴を履いたままで歩いた。アメリカの家によくあるやつだ。

壁には高価そうな壺や絵画がズラッと並んでいた。

「 キャー 」の鹿の置き物、生きてるみたいケロ～

（力チツ）

「 ちよつと正美ちゃん、勝手に触りちや… キャー 」

はい、糞蛙が余計な事をして近くにいた友美ちゃんといっしょに床に開いた深い落とし穴に落ちていきました。

落ちた穴は元通りの床になり、まるで何事もなかつたかのようだ。

果たして僕たちは生きて帰れるのでしょうか？

第20話～え？もう20話？じゃあ巻頭カラーだ……うん、無理だよね～

「正美！友美いーー！リヨータ、ビブシムウ…」

「落ち着け、舞。地下には危険があるかもしれないーー！」は武器が必要だ。この壁に飾つてある短剣を持つて助けに…」

「カチツー

「うわあああ

「キヤー…」

はい、リヨータのせいでもまた二人脱落しちゃいました。

別の穴から落ちていった舞とリヨータ。残つたのは俺と匠だけ。

『ソレはひとまず智則の所まで行こう』

「やうだな、でも…ソレにいるんだーー？」

確かに…そこら中にゾアがあつてもしゃトラップかもしけない」という恐怖心が生まれてしまった。

『迷ついても仕方ないーーこの部屋だあーー。』

「え…？キヤーー！」

わあーー…女の子がお着替え中でした。

そしてリモコンを手にとりボタンを押すとあつといつ間に床に穴が開きました。

「明！…くつ」

瞬時に匠が俺の手を掴み、なんとか落ちないですんだが、体は宙釣りになり匠の手に全てがかかつてている状態になってしまった。

しかし、匠も限界の様だ。映画なんかでは当たり前にあるシーンだが、実際に人一人の全体重を両手だけで支えるには不可能だった。

このままでは匠までいっしょに落ちてしまうと感じた俺は、力いっぱい匠の手を引っ張った。

その反動で片手が床にたどり着いた。

そう、匠と引き換えに…。

「うわああ…明！…めえええ…」

物凄い勢いで落下していく匠だったが俺の命が助かったのだ。匠はこういう役だろ？

「ちょ…あなた、今の人…友達じゃないの？」

俺に話し掛けて来たのは、不意とはいえた下着姿を見てしまった先ほどの女の子。既に衣類を着ていて、身長は150センチくらいの小柄な体格。髪はセミロングで幼い顔立ちの可愛い子だった。

ちなみに下着の色は上下純白である…」ヤリ

『ああ、今のは俺の捨て駒さ。将棋でいうなら王を守るためだけに張られた歩って感じかな。ところで君は?』

「あ、私は雪^{ゆき}。智則の妹ですけど…あなたはお兄ちゃんのお友達?」

智則に妹がいたなんて知らなかつたな。しかもこんなに可愛い子から『お兄ちゃん』って呼ばれやがつて…羨ましい。

『おひ、俺は明。智則の所まで案内してくれないかな?』

「お兄ちゃんは今出掛けちゃつてます。それより…さつき落ちた人を助けに行かないと!」

匠の事を思い出した様にハツと氣付くコキちゃん。

『うん、つてか最初は俺と匠以外にあと四人いたんだけどみんな落とし穴に落ちちゃつてね。それより…落ちるとどうなるの?』

「私も詳しくは分からんんですけど…複雑な迷路になつてるみたいで、奇妙な動物みたいなもたくさんいて…」

結構ヤバイですね。さすがボンボンの家は地下にまで無駄に金を掛けちゃつしやる。

こうして俺はみんなを助けるためにコキちゃんに案内され地下へと続くといわれる階段を降りていった。

第21話～さ、行きますよ～

俺達はまず、最初に落ちてしまつた正美と友美ちゃんを助けに行く事にした。

何でも簡単な場所…つまり物を盗りうとした時に発動する落とし穴の行方はそつたいした罰はないらしい。

だからユキちゃんの部屋から落ちた匠の行方なんて、きっと大変な事になつていいだろうな。

「壁に飾つてある物を触つたら落ちたんですね?なら、この第一の部屋です」

地下の階段を折りると鍵と鎖が頑丈に掛けられた扉があつた。何とも不気味なオーラが感じられる。

「……は任せて下さい」

そう言つたユキちゃんは一本の針がねを取り出し慣れた手つきで鍵を外していく。…って、おかしいだろ!さすが「メティー、何でも有りだな。

ギギッと錆びた音がしてドアが開いた。中は暗くて何も見えなかつたから、俺が持つていたジッポの火を蝋燭に付けて辺りを照らした。しかし視界が悪い。しかも怖い!!

「……怖い…かも」ユキちゃんが俺の服の裾をキュッと握ってきた。

ウヒョウヒョウ～思わず一矢けむりつけられ

『僕の事もお兄ちゃんって呼んでくれないか?』

「…えー~お兄ちゃん…」

萌ええ~!!

さあ、俺に怖い物など何もない。

「キヤ、今あっちで何か光った!」

フフ、大丈夫さ。何も怖くないさ。ちょっとぴり濡れた股間は気のせいなの。

「ち…近づいてきますよ?」

そういや設置古くて忘れてたけど…

「キヤーーー

俺、幽靈とか苦手だったね…。

第22話／輝け世界の明／

「明…！明あ…！」

「誰かに呼ばれている気がする。俺は、どうなったんだっけ…真っ暗な部屋。

そうだ、俺は追っ掛けのファンに捕まつた。全く、そんな部屋に無理矢理誘わなくつても良いのに。真っ暗な部屋は恥ずかしがり屋さんなのかな？

電気を消した時にうつかり寝てしまつなんて俺としたことが…。

さあ、俺はいつでもOKだぜ。熱い夜にじょりじょりないか。

ムムッ、かすかに見えるあの光は蠅燭か！？
まさか…いきなりそんなプレイを求める気なのか！？
変な三角の椅子に座らされて変なムチで叩かれて
「気持ち良いか？」
なんて聞かれたらどうしよう…。

そんなもん…気持ち良いくに決まつてるじゃねえか…！

「いい加減起きろー！」

『ぐはあッ！』

腹に激痛が走り意識が返った俺の耳には、リョータの姿があった。

『嘘だろ！？俺はリョータと禁断の階段を上ってしまったのか！？
…もういいや、開き直つてやる！さあリョータ…好きにしたまえ』

「何気持ち悪い事言つてんだテメエは…」

もう一発腹に鉄拳をもらつた俺はようやく地下に落ちた壁を助けに来た事に思い出した。

まあ、こんだけ更新が遅かつたら忘れるよね。

やはり匠以外が落ちた部屋はいつしょで携帯のライトを頼りに舞達と友美ちゃん達は合流したみたいだ。

『相変わらず怖いのが嫌いなんだな、明は…』

『怖くなんかねえよ、ただちょっと恐かつただけだよー。』

「漢字違うだけで意味大体いつしおかひー。」

「はいはい、お決まりの漫才は良いから。あとは匠だけね、無事でいてくれればいいけど」

舞に止められた俺達はよつやく匠を助け出す事になった。

「とりあえず一回出まじゅう。匠さんの落ちた部屋はここからは行けませんから」

今はユキちゃんだけが頼りだ。俺達一同は第一の部屋を後にした。

途中で、人の骸骨みたいな物体が目に映つたがきっと氣のせいだろう。

決して脱出できずに飢え死にしたなんてありえないのさ。

「また失神するなよ？ストーリーが进まないからな」

今はリヨータに反論する余裕もない。一刻も早く出たい。

俺のこの思いが作者に通じてか、それとも場繋ぎができる程の文章力がないためか、あっさり外に出た。

しかし、匠の部屋に行く事が真の恐怖の幕开けとは……誰も気付かなかつた。

第23話／脱出不可能だつて、いただけないぜ

「渡嘉敷！（とかしき）お前ともあらう者がなんて失態だ！侵入者を取り逃すなんて！」

「いえ、坊ちゃん。侵入者ではなく明様一行のお友達では……？」

「勝手に門を開けたぐらいで警報機が鳴るか！センサーの発信元はもつと別の所から……って、なんだその地球儀は！？」

「いや……これは武器かと思い……。では、他にも侵入者がいると言つ事に……」

「明、匠……無事でいてくれ」

117

-----。

俺達一同はユキちゃんに連れられて、匠が落ちたと言われる部屋まで来た。

やはり慣れた手つきで鍵を外したユキちゃん。今度はコンパクトパソコンを取り出してケーブルを繋ぎ、凄いスピードでキーを叩いていく。画面に大きくOKの文字が出るとカチッとロックが外れた音をしてドアが開いた。ここまで来ると何からツッコんでいいのか分からぬ。

中に入ると部屋はさつきと違ひ明るかった。10畳くらいの狭い空

間の中心に匠が倒れていた。

『———匠——』

みんなで匠の元に駆け寄るとガチャンとドアを閉められた。

『……え？ ユキちゃん？？』

：閉じ込められた？

『おい、冗談でしょ？ 早く開けてよ』

「残念だけど無理ね。色々助かったわよ、私が鳴らした警報機もあなた達のせいになつたおかげで警備も薄かつたし」

何言つてんだこいつ？

「あなたが気を失つた時に閉じ込めても良かつたけど…皆まとまつてた方が都合が良いし、しかもこの部屋は外から暗証番号を入れられるの。じゃあ、私はさつさと財産を手に入れてくるわ。そろそろ私の存在にも気付く頃だろうし」

そう言い残してユキちゃんは行つてしまつた。確かに、俺は馬鹿だ。あれだけ器用に鍵を外したら疑つても良いだろ？

それより匠だ。小さい頃から智則と遊んでいる匠なら脱出方法を知つているかもしれない。

『匠一起きり……』

「うん、ハツ、馬鹿なー俺は明と禁断の階段を上つてしまつたのか!? もつこいや、開き直つてやる。まあ、好きこしたまえ」

『同じ妄想してんじやねえー』

俺は匠の腹に全身全靈の力を込めた正拳付きをぶつ放した。

「ぐはあ、…ん? ハハ…地下の部屋か」

『やうだ、ビうやれば脱出できる?』

「任せなさいよ明君。前にもし落ちた時の脱出方法を教えてもらひつた事がある。この隅から2番田の床の板を外せばボタンが…」

「お、さすがだ匠。今の匠は輝いてるぜ。」

「あつたあつた、ポチつとな」

～シユウウウ～

あれへ、おかしいなあ。なんか壁のから煙が出てきたよ?
しかもなんか苦しいよ?
もしやこいつ間違つた?

「…あ、やういえば脱出方法をなくして変わりに毒ガスになつたの
忘れてた」

忘れるなよ、そんな事!

ヤベホぞ、何せこの部屋は真空状態の密室。たひまち煙が部屋中を

覆つてしまつた。

「苦し……」

「うう……」

マズイな、もう皆限界だ。ドアは開かないし息もできないし……。さ
すがにこの状況はコメディーのノリじゃ乗り切れないぞ。
俺も、もう……駄目か。

——脱出不可能。

第24話～プランAはありませんが、何か～（前書き）

どうも、作者のタンポポです。年越しは忙しくて更新に遅れました。
すいません…。それでも待つてくれた人（いるかな？）ありがとうございます。
ついでいいます。最近笑いの要素が少ないので、見守ってください！

第24話～プランAはありませんが、何か～

もう部屋中が煙に覆われて真っ白で何も見えない。皆は、皆は無事なのか？

毒ガスが発生してから約5分、俺達はその間呼吸をしていない。

普段当たり前の様にしている事ができないと辛いとは、まさにこのことだ。

いつ意識が飛んでも可笑しくはない状態…と、言つよつもつ飛びますね。さようならあ～。

「皆、無事か！？」

あきらめたその瞬間だった。智則がロックを解除してドアを開けてくれたのは。

この部屋が地下であつたために開いたドアから階段を通りみるみる吸い出される毒ガス。

徐々に視界も良くなりやつと呼吸ができた。

「すまない、暗証番号をハッキングするのに時間がかかった」

そんな事できる高校生がいるかよ。さすが超一流の企業の坊ちゃまだぜ。

『「ゴホ…ハア、助かつたぜ智則。俺は大丈…』

俺が最後まで台詞を言えなかつたのは智則の表情が強張っていたからだ。嫌な悪漢が背筋を走り、智則の田線の先を見渡す。

最悪の事態。俺以外の奴ら全員が床に屈している。

『冗談だろ？笑えねえって……！』

駄目…まるで駄目。誰も反応してくれない。

「落ち着け明、ここをどこだと思つていてる？我が家には超一流の医者がスタンバイされているんだ。本来、毒を浴びてもその対処が早ければ助かる」

智則の一言に救われた。まあ、これだけ大きな家だ。それくらいできても当然なのだろう。

「残念ながら、無理…ですな」

俺達の唯一の希望を見事に粉々に打ち砕く言葉を放つたのは、白衣を身に纏い、薄くなつた頭皮、伸び放題で不潔そうなヒゲは白髪で、さらに白くなつた眉毛は無造作に伸び、目が隠れている。ヨボヨボで艶と張りを失つた肌には所々に黒いシミが目立つ。押したら飛んでいつてしまふんじやないかと心配するほど、か細い身体の老人だった。

「ドクター…？どういう事だ！？」

どうやらこの老人が俺達の希望そのもののドクターだつた。なのにその老人に無理と言われては、理由を聞くまで納得いくわけがない。

「お気づきでないと…？一年前…いや、今までの事を思い出してみなされよ」

「一年前？智則がこの街を去つたあの頃だ。深く考えている様子だった智則だが解らないと言う表情を浮かべている。

「まあ、人を人とも思わず、機械のように扱い、すぐに新しい人材を雇う。そんな親子ならば仕方がない」

「何が言いたい…？」

「考へてもみる、一年前と同じ顔触れの使用人がいるか？優秀な人がいると情報が入ればすぐに入れ換えられる。例えどんなに勤めても…どんなに尽くしても…まるで、『ミミ』のようだ。ポイだ！」

俺には深い事など、ましてや辛さなど分からぬ。…が、なぜか涙が出てきた。

「医療なら自信があつたのに解雇されたワシを雇ってくれたのは貴様らのライバル企業さ。そこでだ！貴様ら一家して屋敷を空けていたこの一年、間抜けな奴らを乗つとろつと見たのさ！この屋敷も！企業の権利も全てだ！！」

ワハハハと悪魔のように品のない高笑いをする老人に、先ほどまでの哀れみが消え、それがそのまま怒りに変わった。しかし、殴ろうとしたところを智則に止められる。

「さらにな、我々企業が送り込んだエージェントで、この屋敷は埋まっているのさ」

気が付けば、俺達がこの家に入る時鳴らした非常ベルに駆け付けた使用人がざつと三十人、その全員が老人の後ろに立っていた。

同く重装歩兵が十人、射撃班が十人、一等兵が十人。こいつらが持っている剣や銃はおそらく本物だろう。向けられた銃口から重い冷たさを感じる。

「…馬鹿が」

この絶対絶命の状況でも智則は何か逆転の策があるように笑った。この表情が出るからにはマズイと察知した老人は表情をしかめる。

「確かに入れ替えは頻繁にしてきた。だが…渡嘉敷だけは違う。俺が生まれた時から育ててもらった渡嘉敷が…この屋敷を裏切るものか！」

「ほう…それはどうかな？」

そんなものが…そう言わんばかりの老人の言葉に今度は智則と表情が逆転する。

「遅れました…」

「渡嘉敷…！」

渡嘉敷と呼ばれた男は、老人の裏に付いた。この瞬間、渡嘉敷は向こうの企業側に買収された人間の一人だったことが判明した。

その事実がショックなのだろう。万策尽きた智則は言葉を発する事

ができず、床に膝を付け座り込んだ。

渡嘉敷は雪ちゃんといっしょにいた。全てが繋がった時だった。

「坊ちゃん…この私が裏切るとでも？」

パツと智則が顔を上げた時には渡嘉敷が老人の頭を殴っていた。例の地球儀で。

「いつするしかこの屋敷を守る手段はありませんでした。貴方達一家がいないこの屋敷を守る手段は……」

渡嘉敷はずつと味方だった。敵の作戦を見抜くために寝返ったふりをする、最善の戦略だったのだろう。

「な…あんた達、行きなさい」

リーダー格は老人の他にもいた。雪ちゃんだ。その合図と共に射撃班が一斉に攻撃を仕掛ける。

渡嘉敷は鎧を着ているからダメージをくらう事はない。銃の威力もかなりの物なのだが、何せ鎧が頑丈すぎる。傷一つ付いていない。

しかし俺はと、そな物はなく、まさに無防備。ターゲットは渡嘉敷から俺へと変わった。

渡嘉敷がその事に気付き、俺を庇おうと駆け付けてくれるが遅かつた。

銃口を向けられ鼓膜を刺激する音、ああ……死ぬ……！

……あれ、平氣だ。痛みがない。強くつぶつた瞼を開けてみると田の前には一人の重装歩兵が銃弾を弾いてくれていた。鉄仮面を被っているため、顔を把握する事ができない。……誰だ？

「……くつ、お前達もか……」一等兵、重装歩兵！

雪ちゃんの合図と共に盾と剣を持った兵士が突っ込んで来る。その数ザツと二十人。

「償うべきだな……」

銃弾を弾いてくれた一人の重装歩兵はそう呟いた。前に出て、渡嘉敷側に付く。またしても寝返りの裏を書いた戦略。

「俺達を忘れちゃいないだろ？ 明

忘れるはずがない。その声、拓哉だろう？

「刑務所を出た後、渡嘉敷さんに拾われてな。すっかり更正したよ。俺が犯した罪がこんなので消えるなんて思っちゃいないが……これがらは死くさせもらいます。智則……いえ、坊ちゃん」

その声は和也さんか。

俺はリヨータが握っていた短剣を手に取った。これはリヨータが落ちた時から持っていた唯一の武器である。

『プランB！！』

俺の声に体が思わず反応して陣形を取った拓哉と和也さん。

その陣形とは俺がリューファを仕切っていた頃に、少人数の時大人數に囲まれた時の対処方だつた。

背中を寄り添うように構え、どの方向からの攻撃にも備えられる。

向かつてきた奴らがたとえ何人だろうと…

『よく覚えてたな』

「当たり前だろ？。いつもこれで乗り越えてきたじゃねえか」

向かつてきた奴らがたとえ何人だろうと…

自力でブチのめせ！！
それがプランBだ！！

第25話～飲んでえ騒いでイジられでえ～

「今日は皆に迷惑をかけちゃって、ゴメンな。お詫びにてちりでパーティーの準備をさせてもらつたよ。…じゃあ、カンパニー」

「「「「カンパニー」「」「」」

と、言づわけで始まりましたよ智則君家パーティーが。

なんかもう豪華な料理が盛り沢山で腹の虫が悲鳴をあげている。今なら獸になれそうだ。

さつそく料理に手をつけようと箸を伸ばした。
が、箸は口口口口とテーブルに転がつた。いや、別にそういう年頃ではない。

「明、包帯グルグルに巻いてんだから無理だよ」

そう、俺の右手は怪我をした。けど幸い、大事には至らなかった。

まさか本気で高校生相手に本物の剣使つなんて思わないじゃん。

「「ゴメンな明。俺の部下達が…」

『氣にするなよ智則。皆戻つてくれて良かつたじゃないか』

「それは君達のおかげだよ」

あの後の事は興奮しそぎてよく覚えていないが、プランBは成功し

たよつだ。

部下の人達は降参して、また智則の家来として働きたいと言つていた。

この時代パー（無職）は嫌なのだひつ。

意識を取り戻したドクターに俺達は治療をしてもらひつた。

俺の手の怪我や、わずかながら毒を吸い込んでしまつた旨に解毒剤など、適切な処置をしてくれた。

一つ気掛かりなのはユキちゃんだ。騒動の時に既に姿はなく、行方はドクターですら分からなかつた。

「なあ～こマジ顔になつちやつて？キヤハハ、真面目な話は終わりにしよおよお～」

とか言いながら舞が抱き着いてきた。うん、ことはあるな。

『やめろ舞ー……つてか酒くせえーー』

テーブルの上にはワインやら焼酎が空いていた。匠もリヨータも友美ちゃんも正美も酔つ払つてやがる。

まあ元から酒飲む予定だったから良いんだけどね。

それについて豪華なパーティーになりましたね。

「てめえ明一舞に手え出すなあ～」

はい、突つ掛かってきましたヨリヨータが。

『寝てた奴には言われたくないセリフだな…リヨータ君』

「まあまあ、こんなめでたい席だ。決着はこれで着けなさい」

匠がそう言って俺達に酒を勧めてきた。いわゆる飲み比べと言つてしまつだ。

自慢じゃないが俺は酒がかなり弱い方だ。ぶつちやけ勝つ自信がない。

「まずは俺様から飲むぜ！どの酒を飲めば良い！？」

テーブルの上には色んな種類の酒があり、かなり迷う。中には名産物や聞いた事もない名前のラベルがある。

『ん~…まずはこの辺だろ』

俺はアルコールがかなり弱いチューハイを渡した。

リヨータがコップ一杯に注ぎ一気に飲み干す。

「そんなヤワな酒では、この体を酔わす事など出来ぬわ！」

ピキーン…ドーン…！

うん、たぶん理解できた読者は少ないよね。

「明の酒はこいつだ！」

リヨータが出してきたのは…ウォッカ！？ しかも割りらずこ…？

くつ…こいつはまつにいだ。ってか順序つてもんを考えろ！

「チャ～チャチャ～チャチャンドンゴン あなたの事が好きだから
あ～」

俺がコップを持つて戸惑つていると監から一斉にホールがかかった。
これは飲み切らなくては場が白けてしまう。

『うおおおー』

俺は一気に飲み干した。そして酔つた。

中学の頃から酒は苦手な俺は酔つと我を忘れてしまつりしき。しかも、後の事は覚えていないといつ質の悪さだ。

でも俺視点でやるよ？ だつて話進まないし、つてか俺田立した
いしみたいな？

『ヒヤハハハ～！ヨーダの酒はこれだ～』

俺はテーブルの上の酒全種類を混せたジョッキを渡した。

『チョメ混ゼロメだー』

「てめ…ドリンクバーじゃあるまいし、こんな事…」

さすがのリータ君も戸惑つてるようだね。だつて、なんかゴボゴボいってるし変なの浮いてるもん。ホント、俺つてば何混せたんだ

ううね？

しかめつちらをしたリヨーダつたが、一気に飲み干した。そして吐いた。

「ぬつ……俺様は拳王！拳王は決して、膝など地につかぬ！」

なんてセリフパクつときながら膝がガクガク震えますよ？

そして知らない読者はキヨトンだぜ。

『はい』馳走様が、聞こえない』

俺は再び『チャヤ混ぜの酒をリヨーダに渡した。

「え？ 次は明の番じや……」

「……』馳走様が聞こえない』

わあ 皆、悪ノリ大好きだね。

「う……うわああー！」

おお、飲んだよこいつ。

『はい』馳走様が……』

結局この酒を20連チャンで飲んだリヨーダは見事昇天。胃に穴が空いてるのに右手を掲げて天に帰つて逝きました。

知らない人、そしてパクッてゴメンなさい。まあ、コメディーです

理解したい人は、お金を持ってホテルに行つて椅子に座つてボタンを押してみな。新たな刺激が君を魅了するはずさ！

でも、十八歳未満の人はパパとママには内緒だぜ！？

「さて明君、そろそろお楽しみタイムとこきますかー。」

『やうですな匠君』

「王様ゲーム！」

まあ男女の高校生が集まつて酒飲んだり定番でしょ。むしろやうな
やへタレでしょ。

「面白いわね、やろうよ、友美、正美」

「え…私はこの手の苦手で…」

「大丈夫よ、酔つちゃえはうにでもなるって！」

ふつ…こうなる事も計算ずくさ。舞に勧められちゃ、さすがに友美ちゃんでも断れないだろう。

王様ゲーム：それは数字と王様と書かれたクジを引き、見事王様を引いた人が何でも命令して良いと言われる禁断のゲーム。

もがりんこのゲーム、男女で…しかも酔つてゐる時にせればムフフな展開が待つてゐる。

身近にクジになりそうな物がなかつたのでタバコにペンで数字と王の字を書き入れる。

それぞれがファイルターを掴み…

『じゃあ行くよ。王様だあ～れ…』

「待て！俺様もやる…。てめえら…舞に手えだすんじゃねえぞ…」

本当に場の空氣を乱す男だね、リヨータ君は。おとなしく寝てればいいのに。

『じゃあ、改めて…王様だあ～れだ?』

俺の手から一斉にタバコがそれぞれの手に渡る。

「はあ～い 私が王様！」

第一ラウンドを制したのは舞だった。

俺の数字は2番だ。さて、誰に何を命令するのやい。この瞬間がドキドキですね。

…ん？ あつ！ リヨータの奴、いつやうと舞に自分の数字を教えてやがる…。

けー、あい、えす、えす、Kissですか？ 皆の前で見せびらかすつもりですか？

「一番の人があー…」

リョータ、ニヤニヤしてるもん。あいつ絶対一番だよ。つてか、こんなのは反則だよ。

「王様の足元に落ちたコンタクトレンズを探す」

あれ、Kissじゃない。リョータも
「はて？」
つて顔してるよ。

椅子に座った舞の足元をリョータがひざまづいて探す。

「ホーホツホツホ」

舞の突然の高笑い。これには一同、

「そういう事か」とア然。

まあ、あれですよ。男を奴隸にした女王様って奴ですよ。

そういうえば変だもんね。女の子がいるのに

「王様ゲーム」

つて。明らかに男の下心丸見えのゲームですもんね。

さ、リョータの事を指差して腹抱えて笑つたことだし、次行きますか。

再びタバコを回収してシャツフルする。フィルターの部分を手から出し、皆が一本選択。

でもメッチャ、リヨータの手に力入ってるんですけど。フィルターから綿飛び出ますけど。そんなに王様になりたいのかな？

今回のイジられキャラは君な事まだ気付かないのかな？

『王様だあ～れだ』

どうせ口メティーのノリ的に俺がキングでしょ？ で、リヨータをイジれば良いんでしょう？ まかせなさいよ。見なくても分かる…俺のタバコには王の文字が…

「俺がキングだあ～！」

あれ～？ リヨータが王様！？ ば…馬鹿な。

「まずは明が…」

『いや、おかしいだろ～！王様ゲームでなんで名指しなの～？』

「王様の言つ事はあ～？」

「～～～絶対 「～～

うわあ～皆悪ノリ大好きだもんね。今はその笑顔が悪魔に見えるよ。デーモンだよ。

「デーモンって言つたらお前スゲェよ？」

道端で必死に咲いてる花でも踏み潰すかんね。

「飲み比べじゃ酷い目に会つたからな。どんな事をさせよつかな：フフフ」

「おリヨーダなんか嫌いだよ。お前なんかデーモンの上をいくサターンだ！」

「サターンって言つたらお前スゲエよ？」

奴はアサガオの前に仁王立ちして朝日を浴びせないかんね！

「あれ？こんな所に偶然にも用意されてたチョメ混ゼDXが？さあ、飲みたまえ」

『ああ飲むさ！飲んでやるよチクショー！』

俺は震える手で酒を口に運ぶ。

ドロン…とノド通しの悪い感覚。これはもはや液体飲料ではなく物体や固体の部類だ。

吐き気を押さえ何とか一口目を飲み込んだ所で挫折です。無理ですよ、そりや。

もうルールもクソもあるか。こいつなつたらメチャクチャにしてやるぜ。

『三回戦突入！さあ、早く選べ！』

「…馬鹿が。クジを持つてる奴に選ぶ権利はない。さつき俺様が掴んだ フィルターから綿が出てるタバコ…つまり、これが王様なんだよ！」

ニヤリと笑つたリョータが王と書かれたタバコをゲットした。

「よし、俺様が王様」

『じゃあ、俺は神様』

「なぜ！？ってか神様って何だよ！」

『俺はキングの上を行く存在さ。とりあえず命令、全員酒一気飲みだ！』

-----。

さて、あれからどれだけ飲んだだろうか。一人頭ジョッキ10杯は飲んだんじゃねえか？

全員顔真っ赤、理性も吹っ飛んでるぜ。

「ハハハハ、明君。世の中は金が物を言うのだよ

智則もついに素が出たか。ポケットから取り出した万札をばらまき始めたよ。

「キャ しゃちゅさん凄い～」

友美ちゃん、君は初期設定から今まで清純派女子高生で来たんだよ？

だからそのキャバ嬢みたいな口調とポーズはやめなさい。

「ウヒヨ リヨ、明、お前の顔ウヒヨ リヨ～」

リヨータ、君に笑顔は似合わないから。キャラ変わりすぎだろ。

まあ、正美も舞もイジるの面倒だから省略。

匠はいつも同じ髪型だし、いつも同じ服装だし、いつも同じ顔だもん。つまんねえよボンクラ。

「いや、顔はしようがないよねー？」

明日から学校なのに大丈夫かな、ここにひり。

ま、これにて智則家編は終了だよ。

「誰と喋ってるのよ、あんた」

…ふ、それはこの神である俺をも凌ぐ、画面の前のザウスじゃ。

そういうや忘れてたぜ。俺、酒弱いんだ。

さ、早く終わらすか。ゼウスに俺達の嘔吐物を見られる前

『ゲエエエエロロー！』

……ゴメンなさい。

第26話～いつも余計な事を言ってしまう～

さて今日もヒマだぜ。いやね、智則編も終わって次のネタ探すまで休んでて良いよ。って言われたんだけじゃひま…え？　あ、こうこう事言っちゃいけないの？

ふう、いよいよヒマ人だ。仕方ない、ゲームでもやるかな。

三つとくが俺のゲームの腕前はかなりの物だぜ。

格ゲーやシユーティングはもちろん。脱衣麻雀で毎晩一ヤニヤしてりし、恋愛ゲームじや俺は お兄ちゃん だ。…いや、最後のは忘れてくれ。

最近ハマってるのが育成だね。その名もチョメットモンスター。縮めてチョメモン。

内容は極めて簡単。自分がマスターとなりモンスター同士を戦わせ、育てていくやつだ。

敵として出てきたモンスターを捕まえれば、自分で育てる事ができる。

しかし、それも全クリしてしまった。そのため、今までずっとレベルを上げてた。全クリしたゲームの。マジつまんねえ。

もはや俺のモンスターは最強レベルだ。

とうとう物語が始まる最初の町へ帰ってきた。

草むらからモンスターが飛び出してくる。

LV：99の俺のモンスター。

LV：2の全キャラ中最弱モンスター。

俺はそのモンスターを捕まえると、ニックネームをつけた。

タクミ

そのモンスターを連れてラスボスへ。

『ハーハッハッ！タクミが死にやがった！マジ使えねえ！』

でもアイテムでタクミは復活する。

『アーハッハッ！最高だよタクミ！お前の防御力での攻撃に耐えられるの？無理だよね！粉碎だよね！でもアイテムで復活だから！お前の一生は生き地獄だから！ウヒヤヒヤア』

ふう、飽きた。

しかしこんな事を徹夜でやつてる俺ってどうよ？

お天道様も出てきて今日は良い天気だ。少し寒いけどね。

あ、そうだ。学校でも行くかな。

俺は携帯を手にして匠に電話をかける。

『匠いー？今ヒマあ？』

「おおー。かなりヒマ

『学校行かね？』

「お、良いねえ。じゃ智則でも誘つか

なんて高校生として当たり前の会話を済まし、匠と智則が俺ん家まで迎えに来た。

『よし、行くか！』

「「おー」」

俺、匠、智則の三人はに学校へ向かうため駅へと向かっていた。

こつして友達同士で登校できる。ましてやこの三人でだ。一年前の俺としては考えられない事だ。

他愛もない話しだが、これが友情なんだよね。

なんか今回の俺ってカッコ良くない？

：なんて、自分に浸つてゐ内に学校到着。

今更だが俺達が通う高校は『かんばし駅から一駅隣高校』だ。なんとも読者に分かりやすい名前だこと。

ちなみに舞とリョータは『かんばし駅から一駅隣高校』だよ。

学校は三階建てで共学。校舎は小さいのに校庭が広いのが我が校の特徴だ。

しかも階段がかなり急とされている。男子諸君、これがどういう意味か分かるかな？

そう、スカートが短い子が前にいればパラダイスなのさ。

しかも今まさにその状況。さらばその子は可愛こときてるもんだから、オチサン嬉しいよ。

その娘は後ろに俺達がいるなど知らず、やや小走り氣味に階段を上る。朝から何か嬉しい事でもあつたのだろうか。

その度に揺れるスカートがチラリズムだぜ。

……チラ。

よし、紫のレース、チェック完了だ。

ごちそうさまでした。

『匠がパンツ見てるぞー。』

「バ…見てねえよ！」

フツ、匠よ。今のお前の台詞は失敗だぜ？ なぜならお前が 匠 という事が女の子にバレてしまったのだから。

黙つておけば誰が匠だらう？ つてなつたかもしれないといふのさ。

ほら、女の子が振り向いて匠の事を凄いガン付けてるよ。

『全く……いい加減にしてくださいよ?パンツ隊長』

「誰だよパンツ隊長つてー!」

『あとそれから……女の子にパンティいへりゃって聞くのも辞めてトセイよ?パンツ隊長』

「言つた事ねえよ!」

はい、お約束通り、匠がジンタされました。

そして教室に到着。そういうえば、もうそろそろ俺達も高二になるのか。思えばこの教室に初めて入ったのが第一話だったな。

『おまよお、たく』

「そのネタ一話で使つたからー!」

『てめえ あんま調子こじたツツコミだと 腕ひきうちぎるかんな?』

「伏せ文字ズレてるよ!?-グロにからー!」

…と、まあ教室に入る時は俺達はいつもこんな感じなのぞ。

「ん?おお、久しぶりじゃないか。明、匠。それに智則の話も聞いてるだ?』

もつ本当に久しぶりですね山崎先生。

「へつきつもう来ないと思つてたよ。で、今更向してきたんだ?』

『ハツハツハツ、全く…「冗談は顔だけにして下さいよ』

「ハツハツハツ、いや…「冗談じゃなくて。お前ら三人は単位足りないから進級できないよ?」

「「な…なにいーーー?」」

まあ確かに、最後に学校来たのかなり前だもんね。半年以上行かなかつたら、そりゃ単位不足ですわ。

そもそも作者の更新が遅いんだよ! 今度道端でタンポンが咲いてるの見かけたら踏み潰してやる!

「先生、これでどうにか」

そう言いながら智則が札束をポンと先生に渡した。先生はそれはもう嬉しそうに札束を数え始めたよ。

「智則は入院してたんだし仕方ないか。免除!」

ああ…俺は今、教師の見てはいけない姿を見てしまった様だ。

「おはよお!」ぞーーます」

「おはケ口お」

『あ、友美ちゃん! 正美! 大変だよ。俺達、単位が足りないから進級できないって』

「はい? 私はちゃんと学校来てましたよ? 中盤は出番もなかった事

ですし……」

わあい、ゴメンね。

そして今まで目立ち過ぎた自分が憎いぜ。…フツ。

「ウチも単位足りなかつたけど、山崎にパンツ見せたら許してくれたケロ」

んなコト暴露すんじゃねえよ。匠が泣いてるぞ?

「…ゴホン、どうでもいいが…一人はどうする?方法はなくもないが…?」

「何でもやります。だから何とか…。」

「ふむ、では明と匠には私の作る映画の手伝いをしてもらおう

まだ作ってたんですね。

：と、言ひ訳で俺達は進級を賭け、山崎先生の手伝いをする事になりました。

-----。

「さて、時刻は午後四時。授業を終えた生徒は下校し、あんなに賑やかだったこの教室には私達しかいなくなつたわけだ

」

場面が切り替わっての状況の説明、ありがとうございます。

それにしてもいつの間にか教室にはバカでかいカメラや照明スポット、せりては音声マイクと…ってか、こいつ教師辞めろ。

とにかく大掛かりなセットをよくも揃えたもんだ。

「欲しかったんだよなあ、この誰でも簡単 映画監督セット。さつき智則から貰つた……ゴホン、こいつこいつ貯めた貯金で…」

今チラシと真実が聞こえました。

つてか 誰でも簡単 映画監督セット つて何だよ。

「そ、撮るぞお~」

『はあ~い…つて、俺と匠が出るの…?』

「当たり前だ。匠は学生服のまま、明の衣装はこれだ

そう言つて渡された紙袋の中には衣類の感触。

まさか俺が映画に出演できるとは…ああ、スターになつたらどうしよう。

(キヤー イケメン天才スターの明様だ!)

(本当だ!マジ格好良いんだけど!明日告白するから!)

なんて事になるだろ？。ウヒュヒ

つて事を期待し、衣装着ました。はい、なんでセーラー服なんですか？

「女子高生を見ていたら…完結編だ！」

嘘お～ん。

忘れている読者は第七話辺りを読んでくれ。

「…ふつ、お似合いだよ。明ちゃん」

ちがえるぞ匠。

窓ガラスに映った俺の姿はまさに格好だけ女子。

俺の髪型は、分けた前髪は毛先を口でくわえられる長さだし、襟足も肩で遊ぶ程。

全体的に長いため、女の子と偽れる。

ちやつかりメイクまでされ、恥ずかしさのあまり赤くなつた頬、スカートは短めで男なのに下着が見えていなかと心配するモジモジとした行動は、清純派女子高生…と言つた所か。

つてか俺男じやん？
萌えねえよちくしょ。

「結構可愛くなつたな。よし、じゃあまづは匠が明に告白して抱き

着くシーンか!...』

『待てやコリニアー!..』

『匠に? むりムリ無理!
マジきもいか。』

『え……良いの?……ボツ』

『匠も向うつと懶れてんだよ。』

『一ひんなん嫌だからな!..』

セーラー服を脱げ!とした俺に山崎先生がニヤリと笑つ。

『留年? 〇退学?』

『やりやあ良いんだろチクシヨーが!..』

もつフライドも糞もねえぜ。』

母さん、腹を痛めてまで生んでくれた息子は今、女の子です。母さん…! メンな。

しかし、山崎先生指導の下、深夜に及ぶ撮影は、見事に見回りに來た警備員に見つかり、翌日の新聞の見出しが! う書かれていた。

真夜中の指導! 男子生徒にセーラー服を着せた教師は何を…? ..?

俺は泣いた。

第26話～いつもよつ余計な所をイジつておつかれ～（後編）

更新が遅いのにいつも読んでくれてありがとうございます。本当に感謝します。さて、実は私自身も進級できるか危ないですよ（笑）学生の皆さん、ちゃんと学校は行つた方が良いですよ。

第27話／新キャラはーつ上ー？

さて、前回も色々あつたな。まあ、あの事件が原因で俺と匠は進級を許可されたわけだが…。

代わりに山崎がクビになつてやんの。マジ爆笑してやつたぜ。

まあ山崎は教師を辞めた事をきっかけに、本格的に映画監督としての第一の人生を歩み始めましたとさ。

めでたし。

と、いうわけで今日はかんばし駅から一駅隣高校の卒業式です。

つて言つても、一年の俺達には関係ないイベントだ。なにせチョメディーには三年生のキャラいないもん。ぶつちやけ、どうでもいいですわ。

しきて言つなら学校早く終わつてラッキーみたいな？

あ～はいはい、どうせ俺はこんな性格ですよ。連載当初から悪役ですよ。

でも主人公だから！ ウヒヤヒヤア

-----。

はい、始まりました卒業式。いきなりですが爆睡こいてます僕。

だって校長の話ヒマなんだもん。卒業生の涙なんてコメディーにいらないから。

「続きまして在校生代表挨拶。沖本明君、お願いします」

「あ、はあ～い。…って、ハアアアア！？俺！？」

しかも第一話ぶりに俺の苗字でちやつたよ。

「何でも山崎が辞める耳代は明に頬むつて言つたじらじよ？」

「まあいいだろ？。こんな卒業式、コメティーに変えてやるか。俺はさうそつとステージにてつマイクを握りしめた。やがつたな。

「そうゆう事は先に言えよ匠。山崎の奴、絶対俺に恥かせよ」と俺はさうそつとステージにてつマイクを握りしめた。

『アーコーファンキー』
『..』

「はい、滑りましたあ。ツルツルでござります。

わあ、卒業生及び、パーティーの方を方を始め、会場全体の視線が痛いや。

いや、一人爆笑してるのがいた。誰だろう、俺の学年には見た事ない顔だが…先輩かな？

いやいや、なんで先輩が一番後ろで先生の横に立つてんの…?

もしや…あの人…

-----。

「おい明、あの挨拶はないだろ」

『匠が言ひつの遅いからだろ…もつと時間があれば面白い事が…』

「この失態は血で精算してもらつぞ」

『えー…? 智則つてこんなエグいキャラだったの?』

「でも卒業生の皆さん怒つてましたよ…」

『はい、「メンね友美ちゃん。そんな怒らないでよ』

「でもまあ、明ららしいケロね」

『だまれ糞蛙。てめえに俺の何が分かる?』

「いやあよくしゃつてくれたよ。あんな卒業式くそくうえだよな』

『ホントだよな……つて』

「「誰だあーーーー?」

ホント誰だよお前、何ちやつかりと俺達の会話に自然と混ざつてんのー?
つて、こいつあの時笑つてた奴じやん。…え? 同じクラスだったの?

「おいおい、ノリ悪いぜ皆。これから一年間、同じクラスなんだから仲良くなづけばい?…なあ、友美」

「…………！」

え、何こいつ。友美ちゃんの知り合い?

「おつと、自己紹介がまだだつたな。名前は大橋おおはし 智貴ともか。ぶつちや
け、留学生だ」

こいつダブったのかよ!

つて事は一個上か。チョメディー初の年上キャラ登場です。

この急展開どうなるんだ?

「…………一ヤリ」

次回への伏線と思われる匠の意味深な笑み。しかし、これには全く意味はないぞ。

本当の伏線は友美ちゃんと智貴の関係です。

あれ、まだ終わりじゃないの？ 次回の伏線したよね。それともアンコール？

いやまいつたなあ。

「友美、相変わらず可愛いな。こっちに転校してきたんなら一言声かけてくれよ」

「私はあなたみたいな卑怯な人間とは喋りたくないません」

あれえ～僕が主役なのに無視され気味？

つてかこんな恐い顔した友美ちゃん初めて見たぞ。

ま…まさか智貴つて奴は友美ちゃんの元カレ？

オチサンそんなの許さんぞ。オチサン怒っちゃうかんね。

『「ひの友美とじゅうけい関係だ！」』

「あ、お父さん。俺は友美の彼氏です」

『君にお父さんと呼ばれる筋合いは……って、彼氏！？』

元カレでしかも現在進行系でした。

「違いますよ！勝手な事言わないで下さい……」

何この過去に一人の間に何かありました的な展開は？

「あの後、私がどんなに辛かつたか…」

「いや、だからそれは…」

「もういいです！」

ああ、友美ちゃんとどつか行つちゃいましたよ。

『なあ、友美ちゃんと何があつたんだ？』

「……ん？ああ、実は俺もこの学校には転校してきてな。前の学校が友美と同じだつたんだよ。まあ、皆に分かりやすい様に、次回は俺と友美視点でやるね」

本当の伏線は智貴君でした。

第28話～コメティードの話は場違いな事くらい分かってる～（前書き）

友美視点…シリアルス
と思つて下さい。

智貴視点…コメティー

だ

第28話～「メモリーにこんな話は場違いな事くらい分かってる～

学校までの歩く道のり。決して近い距離ではないのに、あつとう間に時間が経つのは行くのが嫌なのかな。

周りの皆は自転車通学。歩く私を地面に足を浸げずに楽して通り越して行く。

そりや私だって前は自転車通学だつた。でも、さすがに四台も親に買つてもらつわけにもいかないでしょ？

置いておいた自転車を車にひかれた。

パンクしたから捨ててきちゃつた。

遊び先で鍵を無くしたから置いてきたら次の日にはもう無かつた。

苦しい言い訳だつたけど何とか親はほほまかせた。

それも全部嘘。本当は三台とも壊された。だから今日も歩いての登校。

「遅刻するぞ友美！後ろ乗つてけ！」

こんな私に唯一話しあげるるのは智貴先輩。

彼は一つ年上の陸上部。入学した時に憧れて私は陸上部のマネージャーになった。すぐに親しみ、今じゃ智くんと呼んでいる。

でも、それが全ての原因。

「いえ、結構です」

本当は乗りたかった。だつて好きだから。でも、智くんは女の子から人気があるんだ。私が智くんが仲良くしているのを気に入らない女生徒に、いつも嫌がらせをされる。

自転車を壊した犯人もきっとそうだらう。

だから智くんの前ではいつも、本音とは逆さまの事しか口に出せなかつた。

「いいから、ほら」

「え？ ちよつ… キヤ」

智くんは強引に私の手を引いた。照れながらも荷台に腰掛け、肩に捕まり、背中に身を預けた。

凄く…幸せだ。

-----。

教室に入ると床に散らかった教科書。乱れた机と椅子。間違いなく私のだ。

「あんた、頭良いんだから教科書なんかいらないでしょ？」

女生徒の表裏一体となる団結力が、この嫌がらせを先生にバレる事なく継続させた。

「今朝見ちゃった。智貴先輩と一人乗りしてたの。…知ってる? 人乗りって罪になるのよ?」

知ってるわよ。でもあんた達のこの行為は罪じやないって言うのかしら。

この学校は共学だけどクラスは全部で五クラスの一校舎。

第一校舎には主に男子が。第二校舎には私達女子の教室がある。

これは五クラス全てが異なった専門の学科なので仕方ない事だが、最悪な事に私のクラスの学科は食品と言つて、女子専用の学科のため、男子がいない。

つまり、クラスの全員が敵なのだ。

男同士の喧嘩ならその後友情が芽生えるケースも少なからずあると聞くが、女は質が悪い。

我が身が可愛い女は表向きな行動は一切せず陰から嫌がらせをする。

基本的に女の子同士は、初対面の人でもすぐに仲良くなれるが、一度友情が崩れると修復が効かないといつ欠点もある。

もう嫌がらせは慣れただ。

何度も強がつてはみるものの、痛みや寂しさ、悲しみは慣れるものじゃない。

この日は特に苛立っていたから朝のHRが始まる前に教室を出て、そのまま帰路についた。

幸せと不幸の極端な繰り返しに、精神が不安定になっていた。

そんな時に公園にたまっていた同じ学校の制服を着た高校生が。俗にいう不良だ。

いつもここにたまっているのは知っていたが、この公園を通らなければ家に帰れないのだから仕方がない。

「ちよ…あの娘可愛くねえ？」

「マジだーおい、ノリオ、行つてこいや

「ウッス！」

三人組の不良の一人がこっちに近づいてきた。

「なあ、俺らと遊ばねえ？」

ドカンドカと呼ばれるダボダボのズボンに両手をポケットに入れ、短ランと呼ばれる短い学生服を着て、肩で風を切るように歩いてきた。

「いや、昭和の方ですか？今は平成ですよ？」

私は二ヶ「コリ」と笑つてその場を立ち去つましたが、腕をガツチリと掴まれた。

「てめえ…ちよつと来いやあ…！」

所詮、女の力じゃ男には勝てないのは分かっている。
でも…ずいぶん悔しい話じゃない。

性別が違うだけで不運に勝てないなんてや。

それにしてもこんな展開は漫画の中だけかと思つてたのに…実際に
田の前で起きてるんだから否定はできないですね。

ハハ…私、どうなるんだろう…？

-----。

くはあ～眠い。もうお昼か。午前中の授業の記憶なんてありません
が何か？ つて感じだぜ。

「智貴いー飯食おうぜ」

俺の名前を呼び飯食に誘ってくれてこりの奴は、名前をあげてもしょ
うがない。クラスメイトAとじよつ。

俺はA君と飯食を食べるべく、母親特製愛情弁当をとりだそつとバ
ックを開けた。

-----ない。

あ、俺…母さんいないんだつた。

別に淋しくないもん。

腹に貯まれば食い物なんて購買で良いのさ。

———財布忘れた。

はい、お約束ですよね。

「わりいA、ちょっと家帰つて財布取つてくるわ」

「おひ、…つて、Aつて俺の事…？」

昼休みに学校を抜け出し、自転車で家までの道を爆走する。

すると、どうでしょ？

公園で友美が柄の悪い野郎共に絡まれているじゃありませんか。

「ひひあ君達、駄目じゃないか！女子に暴力振るつちやー！」

「…と、智くん…」

「うっせえなー！」

殴られたのか…乱れた制服を見ると相当辛い目に会いましたな。

右頬に強い衝撃を受ける。びりゅうり俺まで殴られちやつたみたいだ。

「智くん！大丈夫…？」

何かが込み上げてくるのが自分でも分かつた。

「ああ～あ…切れちゃつた」

俺は我も忘れて三人組に殴りかかつていった。

-----。

「クスン…ウフ…」

「泣かないのーもう終わつたんだから」

「だつて…だつてえ…」

「あの昭和のヤンキー達もどつか行つちやつたからさーだから…もう泣かないで?智くん」

「……うん」

「はい、ボコられました僕。だって相手三人よ? 漫画じゅあるまい勝てるかつづーの。」

「もつ…無茶しないでよ~でも、助けよつとしてくれて…ありがと

」

しかも女子に慰められた俺ってビリム?

……え？ あれ？ もう友美視点になるの？ ちょっと待つて、最後に一発ギャグやりしてよ。

えーとえーと…… それゆけ！寝過ぎ！しつかりました特急車ーー！

—————。

あら、智くんがうしろに落ち込んだんだね。ちよつと元気が出たと思つたのに急に落ちこんじゃつて。心の中でスベツたのかじりへ。

あの涙は傷の痛み？

それとも心の痛み？

でも、そんな落ち込んだ智くんの表情も好……って、私ったらこんな時に…恥ずかしいです。

「ねえ、喧嘩弱このじどうして飛び出してきたの？普通なら、助けを呼びに行くんじやない？」

「弱い……俺？」

あ、また落ちこんじゃつた。

「……わあ？好きだからじやね？」

……え？ 好き……私を？

「ちよ…急にそんな事言われても…」

「喧嘩が」

そつちかーい！ またベタな展開…。

「何怒つてんだよ友美？」

「別に怒つてません！」

「友美の事も好きだよ。誰よりも」

智くんは一ツコロと笑った。その笑顔に心臓の鼓動が大きく、そして速くなつた。

「…私も…智くんの事…」

好き。

「…え？」

と言えなかつた。

私の馬鹿。

智くんを直視できずに思わず上を見た。

屋根の上にはタンポポが咲いていた。

あつえない所にでもちゃんと咲くんだね。

私の恋にも…花は咲くのかな?

私はそのタンポポをずっと見ていた。

次はひやんと咲ね!。

-----。

だけど次の日、智ちゃんは学校から姿を消した。

第29話 友美ちゃん、せっかく目立つてるトト懸いんだけと君の話、長いんだ

智くんは親の仕事の都合で引っ越し、学校を転校してしまったらしい。

なぜその事を言わぬで行ってしまったのだろう。一言いつてくれればいいのに…。

…ズルいよ。

いなくなる直前になつて告白していくなんて。

私のこの気持ちはどうすれば良いの？

「ちよつと…本当はあんたのせいで智貴先輩は引っ越ししたんじゃないの？知ってるんだから、昨日、智貴先輩があんたを助けるために喧嘩して怪我したの！」

この精神が不安定な時に、さらに追い撃ちをかけるかのような嫌がらせ。

智くんが転校したからといって、女子からの嫌がらせがなくなるわけではなかつた。

むしろ、私が追い出した…など、ありもしない噂が広がり、さらに嫌がらせも厳しく多くなつた。

「…つせえな…いい加減にしろよ」

「え？ 今なんて…」

私は智くんのファンクラブのリーダーである奴を睨み付けた。

初めての反抗だけあって相手もかなりビビッている。

所詮、女は力に大きな差がないため、性格によつて権力が決まる。

物事をはつきり言つ、気の強い人は上位グループに所属される。

よつて、私のように眞面目でウジウジしてる性格は、そんな上位グループからの絶好のいじめられっ子だ。

でも、そんないじめられっ子の気が強くなればビビりだらつ。

高校生にもなつて女同士で喧嘩なんてしたくないだろうし、仮に喧嘩になつても、先程言つたように、力に差はない。

こいつらいじめっ子は、勝率十割の事しかやらない連中だ。度胸はない。

五分の立場になつた私と喧嘩しても勝率五割。

普通に考えれば低くも高くもないが、やる価値はある……と言つた所か。

でもやらないんだよね、こいつらは。

いい子ちゃんを取りたいから。

さすがに顔に傷ができるれば先生にもバレるだろ。原因を辿つていけば、今までの悪事が全てバレるのだ。無理もない。

「——の……調子に乗るのも……」

「パチン~

「痛い……？痛あーい！」

あ～あ、頬っぺたにビンタしだけなのに大袈裟に痛がっちゃって……しかも泣いちゃったよ。

なんだ、こいつらも皆弱虫じやん。

なんで私は今までこんな奴らなんかにビンタしたんだひ。

「次は……」

私は次の目標ターゲットを決めるときの娘の前まで歩いていった。

「……ヒツ」

「パチン~

次々と泣き始めるいじめっ子達。

私の顔は……たぶん笑っていた。

—————。

後日、先生から私に言い渡されたのは一週間の自宅謹慎。私は今までいじめられていた事は言わなかつた。

だから謹慎は私一人。

理由も聞かれたけど黙つていた。

先生も言つていた。

「なんで君みたいに真面目な子が……」

…と。

親には酷く叱られた。

「恥ずかしくてお前などもう家族ではない！」

私の親は市長をやつており、私のせいでの名誉に傷がついたのだ
るつ。

兄も姉もいる私はお荷物なのだ。

そしてつこに言われた…

「友美、明日からこの学校に行きなさい。住む所と生活費は一応
で支配する

かんばし町から一駅隣高校?
ふざけた名前…。

―――。

「ヒトの肌ひじきローラー」

なるほどなるほど、長かったです。

あ、視点はチョメテイー主役の右も左も明様です。

友美ちゃんが俺達男には言こいくだろ?と思いつつ、代わりに正美が聞いておてくれたわけだ。

『だつてよ、智貴。ひとつとお詫わせ。読者の皆さんも真面目な話いや飽きるつ』

「バツ…簡単ヒトツナヨー俺はチキンの醤さんで有名なんだぞ!?」

ああ~出たよチキンの言訳。

『じゃあ何での時は告れたんだよ?』

「そりやお前…見渡す限りの地平線の前じゃ一人の愛は激しく燃えるだろ?」

意味わかんね。

いや、ちよつと待てよ。

『ピッときたー! 匂、ちよつと耳貸せや……ひんひん』

「なるほどーそつや面白こ

こつして俺達は智貴と友美ちゃんにドッキリサプライズの計画を実行するのであった。

-----。

作戦1、～まずは一人の仲を確認しつづけ

「急いで呼び出して…何？」

「はあ？ 明は友美が俺を呼んでたつて言つてたけど？」

「違つわよー匠さんは智く…いえ、智貴先輩が呼んでるつて…」

そつ、俺達は何とかこの一人をくつつかようとしている。

たまにはハッピーな展開も良いでしょ？

一人の様子を隠れて見守る俺達。さつき聞いちゃったもんね。友美ちゃんが『智くん』って…智くんって…

ああうくしょー！

あんな可愛いう子からせざりひまじこ…！

『匠ー作戦2行くぞー！』

「早いなー！」

作戦2～あの日のラブを返してみーーーーー

これは至って簡単な作戦。つまり、友美ちゃんが絡まれた時の状況を俺達で作ればもうその場の流れでイケるはずだ。

俺達はヤンキー風のファッショனにマスクとサングラスで顔を隠し変装した。

これならバレないだろう。

「へーい そこの彼女！ ホテル行かない？」

それは汚いぞ、匠。

「おー、お前ら何だよー。」

はい、智貴に殴られます匠。

(明…これで良いんだよな)

…と、匠からのテレパシー。ここまでハッキリと聞こえるのは小説だからだ。

(ああ、わざと負けるんだ。そつすればありがとう智くん…ってなるはずだ。それに智貴は喧嘩弱いから、大丈夫だ！)

俺もテレパシーで返事する。

(ハハ…でも、ちょっと痛いや…)

殴られ続ける匠。

でもなぜかその顔は人のために働けて幸せやつだった。

(明…もひこいだりひへ。ナニナリ止めてくれよ)

(いや、まだ早い)

ひたすら殴りられる匠。

お前こそ本当の親切さんだ。

(明…まだか…ーー)

(まだ早い)

さらさら殴られる匠。

ぶつけられこれが狙いです。

ハーハッハ、まじウケる！

顔ボ「ボ」ジちゃん撲。ツボ！ ツボだよ匠ーー！

わて、そろそろ良こだらつ。匠も白皿で泡ふせはじめたし。

『わ、こんな奴らほつとこで行け』

俺は友美ちゃんの肩を抱き歩き始める。

「…え？ちよつと…」

『あれ？それとも、あんなのが彼氏なの？』

「彼氏なんかじゅ…」

『じゃあ行こうか』

ウヒョヒョ～友美ちゃんの肩はか弱いねえ～ めっちゃ良いかほり
がするよん

「待てやあーー！」

何ですかチキンさん。

「俺は友美が好きだ」

…ふう、やつと言ったか。友美ちゃんも顔真っ赤になってるよ。く
そ、やっぱり智貴ムカつくな。

『なるほど、負けたよ。行くぞ、そこのボコボコになってるボンク
フー。』

後は一人で何とかなるだろ。ああ～あ、やつと真面目な話しが終わ
つたよ。

「智くん… 一つ聞かせて? 何で黙つていなくなつちやつたの?」

「それは…どの言葉も全部、最後は「ゴメン」に繋がりそうだから…
それじゃ嫌だろ?」

申し訳なさそうに笑う智貴。

「もつ…淋しかったんだから」

照れ臭そうに笑いながら抱き着く友美ちゃん。

はつ、お前ら記念日に別れろ！

第30話～30話記念～サターンの前兆～

しゃああ！ 今日は30話記念と並んで全員で チョメチョメ島チョメペラダイス つむづむ、まあ用は遊園地みたいなトコに来たんだよね。

リヨータ、匠、友美ちゃん、正美、舞、そしてこの明様で智喜の車に乗ってきたのだ。留年したとは言え、わざわざ車の免許は取つてたみたいだね。

智則はお留守。つむづむおひこに絡みにくいキャラ的にいただけないし動かしにくいくのよね。

「キヤー凄ーいケロー！」
「早く入ろうよ、友美ー。」
「はい、皆も行きましょ？」

「…はー」

ええ、そりゃ女性陣はテンションも上がるでしょうね。

でもね、まず智喜の車、軽なのよ？ 僕らトランクにブッ詰まつてきたんだぜ？

「おーい、行くぞお前らあ～

あの野郎は運転手だからって…

まあいい。トランク見たらさぞかし驚くだろ？

「おうと、トランクに入れといたお気にのシャツに着替えるかな」

フフフ、三時間ドライブの結晶だ。

「ぬおおーー誰だーー？俺のシャツに嘔吐物ブチまけやがったのはあーー！」

ハハハーぞまあみる。

センスの古い台詞で悪かつたな！

さて、それではボチボチ入園するとするかね。

「行こひ、智くん」

「つ、シャツうーー」

ゲートの前には券売機があり、ナビゲーターに従いチケットを購入しなくてはならない。

いらっしゃいませ、カップフルで一千円になります

あ、友美ちゃんと智喜が先に行っちゃった…。
フン、まあいいだ。

「ほり、行くわよヨーダ

「く…車酔いが

いらっしゃいませ、カップフルで一千円になります

つうか入園料がカツプルつてどうゆう事じやい。

「タクミン、行くケロよお～」

「お…お～う」

いらっしゃいませ、カツプルで一千円になります

あれ!? ストーリー上じやまだあの一人付き合ひにないよね?

そして残された俺と…あれ? このイケメンに特定のキャラなし!
? 待て待て、俺一人つてどうゆう事だよ!

遊園地で男一人つてどんだけ? ……泣けてくるぜ。

まあ良い。とにかく入るわ。

いらっしゃいませ。サターンの方は58000円になります

俺サターンか!

つてか何そのゲームみたいな金の単位は!

…すなわちズーマです

原チャ!? ズーマ58000円つて?!

じゃあ円でも良いんですけど…

じゃあつて何だよ。58000円でしょ。…高めよ。

どうせ汚い金だべ?

機械の分際で何こいつ！

荒らす者は高いってか。ハツ、面白い。ビツセ汚い金じや。くれて
やるわい！

……俺、ホントに主人公なのかな？

ようやく入園できたものの、すでに財布はカラッポだぜ
入園料でフリー・パスだから遊ぶ分には問題ないぞ。

休日だけあってアトラクションには結構並んでいるな……。

おっと、先頭グループにリヨータと舞発見！

はいはい、ちょっと失礼しますよ。

「ちゅ……明一ちゃんと最後尾に並びなさいよ……」

『固い事言つなよ、なアリヨータ？』

「あ……ああ」

ん？ 絡みが薄い……そうか！ 今俺らが並んでるのは地上100
メートルから急行落下の絶叫マシーンだ。

リヨータはウォータースライダー」ときでビビる奴だもんね。

つてか、女より男の方が絶叫系ダメだって言つ奴が多い気のせいかな？

ちなみに俺大好き。

男は黙つて絶叫でしょ、みたいな。

ついに俺達の出番が回ってきて、椅子に腰掛け、安全レバーを下ろす。

あれ？ ちょっと俺の安全レバー緩いってか力チツて鳴らないんですね

けど…。

おい、ちょっと待て！ まだ上がるな…レバー！ 俺のレバー壊れてるから…！

そして一番上まで到着。はい、僕これから死にます

スリー…

ああ、死へのカウントダウンだ。

トゥー…

俺の人生短かつたなあ…。

ガコン…！

ざけんなあ…！

安全レバーがない俺は落ちた振動であつといつ間に外に放り出される。

…って言つてる場合じゃないよ…

ヒヤアアアあアアアア！！

落ちる墜ちる墜る――

オチでますよボケ！

はい、でも浮きました

た二で僕サターンだもん
サターンは空飛べるんだもん

おお！？ マジか！？ 俺飛べたのか！？

：チツ、地上に戻った舞は気絶したリヨータの心配して俺がいない事に気付いてねえや。

もういいもん。

ちょっとくらサターンしていくつかな

はいはい、ちょっとすいませんね。

『よお智喜!』

「何だよ、器、ちゃんと並べよ。」

あーいたたたたた。

そうですよね、友美ちゃんは智喜と一人つきりで観覧車に乗りたいんですね。サターンなんて邪魔ですよね。

こんな可愛い子にこんな迷惑そつな顔されるとオチサンまじつけちゃうよ。

『ハハハ、まさか。一人の邪魔はしないよ。友美ちゃんは一人つきりが良いんだもんね？』

「え……いえ……別にそつぬう意味じゃないですけど……」

『ヒロウで智喜……』

「んあ？」

『ヒロの前ナンパした子ヒロうなつた？』

「ハア！？ちよ…ナンパなんてしてねえよ！」

『おいおい、智喜がナンパしたいって言つたんじゃーん。お持ち帰りしたの智喜だけだぜ？』

「バツ…何言つてんだお前！」

「智くん…エリカの事？」

「誤解だ友美い～」

ハーツハツハツ。

お前ら記念日迎えずに別れる！－

さあ～て、匠達はどこかな？

俺はピコンと大空に羽ばたいた。

そうです、コメティイー…いや、チヨメティイーは何でもあります。

お、いたいた。

何だよ、園児が見るような戦体ヒーローショーなんか見てるよ。

ちょっと空から見ようとするかな。

グハハハ、それではチヨメマンが来る前に人質を用意しようかな
？

ステージの上から悪役のオッサンが客席まで降りてきて、人質を探
しているようだ。

キヤーとかウワーとか騒いだり、中には泣いちゃう子までいるよ、
可愛いね子供は。

よし、人質は貴様にしようかな！

「ア…アチキの事…？」

はい、お約束。人質は匠でした。
つかアチキつて何だよ。

ステージまで連れて行かれた匠は凄い恥ずかしそうだった。

皆、大変よー！」のお兄ちゃんを助けるために、大きな声でチョマンを呼びましょー！…セーの…

チョママーン…！

会場の子供達が一斉に叫んだ。なんか「ひめつのつて純だよね。

今行くぞ！

カツコ多つ！

つてかメツチャいつぱいチョマン出てきたんですけどー！

うわあ…あれリンチだよ。悪役速攻でやられんじやん。

人数が多い方が勝つ！

正義の味方がその決め台詞ダメだらー！

「あ…ありがとーう…チョママーン…！」

匠がお愛想で笑ってあげてます。

でもこれじゃあ面白くありません。彼には本当に死を覚悟する緊張感を味わっていただきましょー。

私はそう考え、気が付くとステージに飛んで行きました

『グーアーハツハツ！』

匠を抱え、畠に浮く。

子供達は人が空を飛ぶのを田の前に大喜びだ。

「ママー、あれどうやんの?」

「ワ...ワイヤーアクションよ!」

空氣の読めるママさん、「協力感謝します。

お...おい、こんなの台本にないぞ!?

ってか何で飛んでんだよ...

...ど、どうする?

複数のチョメマンはかなり焦っている。当たり前だ。

『ハツハツハツ。じつするチョメマン。ここをこの高さから突き落してくれようか!』

俺はさらに高度を上げた。

「明、何の冗談だよ!」

『いや...なんかノリで飛べるようになったからや、ノリで盛り上げよう!...』

「お前ノリで殺す氣か!」

「今回ばかりは、あなたがやつてゐ事はノリだけじゃ済まされませんよ、明君」

俺達の前に突如現れたのは、可愛いらしい女の子だった。ツヤのある綺麗な緑色の髪は肩にかかり、透き通るような白い肌、パツチリ二重で瞳の色が赤かった。

俺と同様、浮いている。

『誰！？』

「はじめまして、私の名前はエン・リューファ。天使です」

「天使？　ああ～…ついにこの小説もそっち系の話になってしまったのか…。」

まあ作者も一般高校生ってだけじゃネタなんてねえよチクシヨオ！
つて嘆いていたし仕方ないか。

「あ、心配ありません。次回で最終話ですから」

『何いい――――？？』

最終話／チョメティーハ

…あ、どうも前回からサターンの明です。

なんかね、今エン・リューファって子から説明されたんだけどね、マジで俺サターンだつたんだって。

俺が生まれてすぐに父も母も死んじゃつて…なぜか尻尾も角もない俺は人間界に刺客として送られたんだって。

実際、天使も悪魔も、人間と体のしくみは変わらないんだってさ。

でね、俺が浮いてる所、一般の人見られちゃつたから、俺、魔界に帰るらしいよ。

『…で、でもさ何で天使が来るの？普通なら同じサターンが来るんじゃない…？』

「サターンとは悪魔の最上級のランクなので、こんな仕事はしません。あなたの両親は名高いサターンでしたので、子孫にあたるあなたもサターンになります」

俺、人間から見たら最悪の存在でした。

「それに、人間界が荒れるのを一番恐れているのが神様です。逆に閻魔様はそれを望んでいます。なので、あなたを魔界に連れ戻します。あなたの始末は、ミカエル様が付けるでしょう」

…と、言うわけらしいすよ。なんか無理矢理な展開だね。

「それと、私が来た理由はもう一つ。…時間ジャスト、そろそろ変形が…」

「…なんか尻と頭と背中が痛い…いたたた！ 何だこれ！」

「はい、鏡」

『何これ…?』

俺の頭からは角、尻からは尻尾。むらむら背中からは羽が生えていた。

「未熟のまま生まれたサターンは18歳になると、その姿の本性を表します。今日はあなたの誕生日です」

あ、今日は俺の誕生日か。小悪魔明ちゃん誕生日

だから男じゃ萌えねえつつのー

女子高生の格好といい、この小説に、ちょいヒロスの魅力もないんか！！

『なあ…絶対戻らなくちゃ…駄目?』

「できるかぎり戻つてほしいです。と、言うのも、その姿になつたあなたは、人間の心を失い、悪のサターンの心に戻ります。友達に悪影響です」

『分かつたよ。じゃあ、匠。俺…帰らなくちゃいけないみたいだか

匠を地上まで下ろさないとする。

「お……おこーー待てよーー。」

『馬鹿……暴れんなよー！本氣で落ちるぞーー。』

「確かに考えてみれば、今までのお前の行為はサターンだけじゃー。」

悪かつたな！

「明は俺の親友じやねえのかよー！」

…………匠……。

「おこーー！明ー！新キャラで俺出しどこにてもつ終わつかよーー！さけんなーー！」

ちゅうじ絶頂に来た観覧車に乗っていた智喜が、窓から顔を出しこんでいた。

「明は私がこっちに来て初めてできた友達なの！相談も乗ってくれたじゃん！私と智くんが仲直りできたのも明のおかげだよ？……だから……行かないでよ……」

ハハハ、ありがとう友美ちゃん。行かないでなんて……智喜さえいなければ最高のラブコメなんだけどな……。

「明あーー！」

今度はまた地上一〇〇メートルの絶叫マシーンに乗つてゐる舞ヒロコ
一タか。

「あんた何調子こいてんのよーーのまま行つたら撃つわよーー！」

あんまりヨーダの事、尻にひくなよ。ガキの頃から楽しかったよ。

ハハ…舞が泣くなんて…珍しいじやん。

「あ…明。俺様が…認めた…友達…なんだぞ…」

リョータつたら、やつときは氣絶する程ビビッてた絶叫マシーンな
の！」

……無理しやがって。

「ああ、残念ですけどそろそろ…」

『…ああ

今度こそ匠を地上まで下ろす。

その間、匠は震えていた。

バツカ野郎。今空にいんだぞ？

…雨なんか降らすんじやねえよ。

「明は……いつもウチの事忘れてるケロ…。初登場の時、だつてクラスメイトなのに知らなかつたケロ…だから…ウチの事…もう忘れないでケロ…」

ハハ、大丈夫。

語尾にケロなんて付ける奴を忘れるかよ…。

ああ、なんか、今日は六つも光つた雨が見えるや。

『待たせたな…』

俺達は空高く飛び立つた。

皆、ありがとな。楽しかつたぜ。

-----。

『なあ、あんた…さつき瞳赤かつたよな?何で今は黒いんだ?』

「え? 私、赤かつた?」

『ああ、メッチャ赤かつた』

「い…色々あるのよ! ジヤあ私は次の仕事があるから。あんまり天使とサターンが一緒にいるもんじやないわよ」

：？ なんでこんなに動搖してるんだろう？

「じゃあね！」

『あーおいー何か落としたぞー！』

「え……？」

リューファが落としたのは紙切れだった。

ん？ 何か書かれている。

『何これ？』

「次の仕事！ あなたには関係ないわ！」

『なあ、俺もそうだつたが……あなたつてのは止めてくれ。明つて名前がある』

「明つて呼んでどうなんのよ？」

『人間は名前で呼ばれた方が親密度が上がるのさ』

『……フフ、でも、もう人間じゃないし、明つて名前じゃないのよ？』

『マジか！？ まいったなあ～じゃあ俺の名前つて？』

NEXT TARGET～日本、809-16 木ノ下 譲

「確か… チョ・メティーって名前よ」

『何その韓国人みたいな名前!』

「でも… これから人間と話す時は参考にするよ、明」

『おう… ハハハ』

「人間界にいたせいかしら… サターンとは思えない程心が優しい。明がこのまま成長すれば… 魔界と天界も争わないで済みそうな気がする…」

『何ブツブツ言つてんだ?』

「別に… ただ… 人間つて楽しそうだなつて…」

『おう! 人間は楽しいぞ! でも、これから俺が魔界を楽しくするんだ』

——END.

いつも、作者のタンポポです。後書きまで読んで下さって、ありがとうございます。

エン・リューファは『リプレイ』という小説に出した天使ちゃんで
す。

主人公の譲に会う前の話でした。

明の不良グループ名もリューファでしたね。なぜかリューファって
言葉を気に入りました。

麻雀をやる人は分かると思いますが、リューファは中国語で『あお撥き龍』と言つ意味です。

さて…チョメディー、終わっちゃいましたね。

連載を始めたのが去年の夏なので、かれこれ10ヶ月の間、明達は
私の中にいました。

ノリだけで書いていたので更新も遅く、ネタもないチョメディーが
ここまで続いたのは読者様のおかげだと感謝しています。

…が、さすがに一般高校生という設定だけでは限界でした…。

これも私の力不足という事ですね。

なので、じんな中途半端な終わり方になってしまい、「めんなさい。ちなみにキャラの名前を考えるのが苦手な私は、学校のクラスメイトの名前を勝手に使ってます（笑）

アクセス数は今回で3000を越えました。本当に感謝です。

次回作はちゃんとした初期設定からキッチンと決めますので、またご愛読して下さったなら光栄です。

評価・メッセージを下さった方々、本当に感謝しています。

この小説を読んで一度でも笑ってくださる方がいたら、私はそれだけで書いた意味があると喜びもんです。

長くなりましたが。それでは、今まで本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8141a/>

チョメディア

2010年10月10日01時41分発行